
異邦人

荏田

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異邦人

【Zコード】

Z5835U

【作者名】

莊田

【あらすじ】

遺跡を調査中、魔方陣を発動させてしまったノエルは、気づくと見慣れぬ草原にいた。同じく気づいたら草原にいたと言つミカと名乗る男と共に、状況を開すべく情報収集をはじめる。しかしその夜、ノエルとミカは自分達の世界にはあり得ない二つの月を見る。

異界の天才少女と異界の剣士の、異邦人同士の異世界物語。

第一話 遺跡

「頼むよ。お願い。このとおり」
拝む幼なじみに辟易してうなずいたのは十日前。

王都から馬車で三日、発見された古代遺跡に、ノエルはいた。

「どうだ？ノエル」

幼なじみのラインハルトは、半年前騎士に叙された。

今回の仕事は、ひと月前に発見された古代遺跡の事前調査。それに同行する研究員に、ノエルが選ばれた。選ばれたといつても、何があるかわからぬ事前調査同行など、誰もが嫌がる仕事だ。ラインハルトが幼なじみにかこつけてノエルに頼み込んだ、それだけだ。ほかにやらなければならぬことがあるからと、ノエルは最初断つたのだが、ラインハルトの頼みようについに折れてしまった。

「典型的な古代アーサーン王朝の遺跡でしょうね。魔法の研究をしていたようね……もしかしたら研究所だったのかも」

いくつかの区画をまわったあとで、ノエルは結論づけた。

「大きな遺跡みたいだから、調査には時間がかかるでしょうね。アイク教授が喜びそう」

アイク教授は、ノエルの在籍している国立魔法研究院の教授だ。ノエルの席は付属大学の学生だが、その知識と能力を認められ、ほとんど研究院につめている。アイク教授は、ノエルとともに話の合う教授だ。

ノエルは研究院の中で異彩をはなつ若さだし、アイク教授は教授達の中で飛び抜けて若い。お互いの年は一回りも離れているが、置かれている状況が似ているせいもあるだろ？

「事前調査も一日で終わりそういうもしないな」

古代遺跡や魔法研究に興味のないラインハルトはつまらなそうだ。彼は幼い頃から騎士に憧れていたから、もつと騎士らしい仕事をし

たいのかもしない。けれど平和になった今、あまり騎士らしい仕事もそうないだろう。

「三日四日はかかるでしょうね。近くの町の宿をおたえているんでしょう？」

「町つづうか村だな。のどかな村」

「屋根があればなんでもいいわよ」

研究院で雑魚寝することもあるノエルだ。寝床に頬着はない。しばらく歩きながら壁面を調べていると、開けた場所に出た。

「広間かしら」

天井が高く、面積は広い。

王城の大広間にはもちろん敵わないが、ノエルの部屋が五つは入りそくなくらいだった。

中央に朽ち果てた燭台がぽつんと立っていた。周辺には燭台より身長の低い岩だらうか？五つ等間隔で燭台を囲むように並べられていた。

「これは……」

ひとつひとつ岩を見る。

「すごいわ。びっしり古代文字が刻まれている」

魔法によつて世界の三分の一を手にしたといわれるアーサーン王朝。榮華を極めた時代、知ある文字として見つけ出された古代文字。「見たことがない配列ね。古代文字研究の連中を連れてきた方がいいわね」

「俺には模様にしか見えないよ」

「少しは魔法の勉強したら？ 明かりをともすくらいはできるんじやない」

「明かりともすだけでも、知ある文字とやらー24字とその意味を覚えないといけないんだろ？ 無理」

「情けないわね。あんたの恋人は、少なくとも526字覚えているはずよ。それだけじゃないけどね」

「そ、そうなのか？ すげーなトリシャ」

ラインハルトの恋人であるトリシャは、国立医療院に在籍する治癒術師だ。知ある文字だけではなく、魔法を使用する上で必要な術構成や医療知識や薬学知識まで、あの小さな頭につまっているのだろう。

雑談を切り上げて、ノエルは中央の燭台に近づいた。

朽ち果てていながら、倒れることのない細い燭台。すでに二千年近くが経過しているであろう。

「魔法の力かしら。けれど、ここまで持続するなんて」

周囲の岩の影響か。

それとも、燭台にも刻まれている古代文字の力か。

ノエルはしゃがみ込んで文字をひとつひとつ確認する。

「世界　海　境界　一つの太陽　二つの月　？いつたい
何の研究をしていたの……？」

その瞬間だった。

「え？」

ノエルの足下が光る。

光によって描かれた、地面の円。

「魔法陣？！」

「ノエル！」

ラインハルトと、そして同行していたほかの騎士達が異変を察知して集まつてくる。

「近づかないで！危ないわ！」

「それはおまえだろ！逃げる！」

急いで待避しようと走り出そうとしたノエルは、しかしその足が動かないことに気づいた。

「な……」

言葉を失うノエルは、魔方陣がはなつ光がいよいよ強く、白くなっていることに気づいた。

「ノエル！」

ラインハルトの悲鳴のような声。

ノエルを呼び続けるその声が、唐突に途切れる。

すでに周囲の景色が見えないほどに、光が強い。まぶしすぎて強く目をつむる。

ぐらりと身体が揺れる。前に意地の悪い大人に勧められて酒を口にしたときの感覚に似ている。内側から揺れる感覚。平衡感覚を失い、ノエルはその場に倒れ伏した。

「……ハイノ」

小さく口にしたその呼び声は、世界のはざまにかき消えた。

* * *

光が収束した後、ラインハルトはようやく目を開けることができた。

あの強い白い光。目を開けていことができなかつた。
チカチカと明滅を繰り返す視界。「じしじ」と両目を腕でぬぐう。ようやくまともに見えるようになつた視界の中。

「ノエル……？」

そこには五つの炬と、朽ち果てた燭台があるだけだつた。
燭台の傍らにしゃがみ込んでいた幼なじみの姿は、どこにもなかつた。

「ノエル！」

高い天井にラインハルトの呼び声が響く。

しかしその声に、応えるものはいなかつた。

第一話 出会い

ノエルはぼんやりと目を開ける。途端、まぶしさに目がかすむ。

「う……」

「じじ」と目をこすりながら、だるさの残る身体を起こす。

ようやくはつきりしてきた視界に、人影があつた。

「……だいじょうぶか？」

戸惑つたような、男の声だった。ラインハルトではない。聞き慣れない、知らない男の声だ。

年の頃なら、18になるラインハルトと同じくらいの青年だった。肩口で切られた黒髪に濃茶の瞳。腰には長剣。衣服はノエルの知る傭兵か情報屋のそれだ。

「だれ？」

ノエルはぼんやりと問う。まだ頭がはつきりしない。有り体にいえばだるかった。

男はノエルが発言したことに衝撃を受けたような顔をして、ノエルのことを凝視した。ノエルは不思議に思う。ノエルの視線よりも高い位置にある男の顔を見つめていると、後ろの景色がようやく目に入った。

一面の草原だった。真昼の空の下、ゆるやかな風に揺れる草花。遺跡内部にいたから時間感覚は曖昧だが、それでも昼に遺跡に入つてから数時間は経つていて、こんなに太陽が上にあるわけがない。それだけではない。遺跡の周辺には、このように背丈の低い草が茂る草原など存在しない。

「こ……どこ？」

ノエルが呆然と呟く。

「大丈夫か？」

よほど頼りない聲音だったのか、男が気遣わしげにノエルを見た。

ノエルは警戒心をたたえた目で、男を見上げる。

「ここはどこ？」

「俺にもわからないんだ」

男は困ったように笑う。

「気がついたらここにいた。なにか、すごい力に巻き込まれたようにな気がした……」

思い出すように、男は遠い目をする。
しかしすぐにノエルに視線を戻す。

「俺はミカ。ミカ・ヤノ」

それが、ノエルの最初の質問に対する答えなのだと気づいた。
ミカ。不思議な名前だ。

「私は、ノエル・カツタ。リュングス国魔術師よ。国立研究院付
属大学の学生」

「リュングス？」

ミカは不思議そうな顔をした。

「中央大陸北東部一帯を領土とする王国よ。知らないの？」
「知らないな。中央大陸がナンゼナル大陸のこと言っているなら、
北東部はミコレシア帝国じやないか？」

「ミコ……？」

話が通じない。

否、ミカはノエルが知る傭兵や情報屋より紳士的で、話も通じる
男だ。けれどその話す内容は、ノエルの知る世界のことを言つてい
るとは思えなかつた。ナンゼナルもミコレシアも、ノエルの知識の
どこにも該当しなかつた。

「世界……？」

そうだ、あの燭台に刻まれた古代文字。

世界、海、境界、一つの太陽、一つの月。

「まさか」

ノエルは首を振る。

「まだわからない。わからないわ」

結論を急がない。アイク教授もいつも言つてゐる。

ノエルは立ち上がると、真上にある太陽を仰ぎ見て唇をかんだ。

「夜になつてみないと、わからないわ」

「なにがだ？」

自分の思考に沈んでいたので忘れていたが、そういうえばここにはこの男がいたのだった。

お互に立ち上がつてみると、ミカは長身だ。小柄なノエルは仰き見なければならない。腰の剣は重そうで、傷もついている。実際に使用されたことのある長剣だ。剣士らしく上半身が発達している。一目見て、ラインハルトよりずっと腕が立つのだろうと直感した。「夜になつてみないと私の置かれている正確な状況が判別できないの。あなたは……どうしてここに？」

「俺は……」

ミカは視線をそらす。

「言いたくなければ、言わなくてもいいけれど」

「いや、そうじゃないよ」

ミカは苦笑する。

「……精霊の塔と呼ばれているといひた」

「精霊？」

「遠い昔から、精霊がいると言われている塔だよ。俺はどうしても精霊に会いたくて、そこに行つたんだ」

「会えたの？」

「会えたよ。そこで精霊とたくさん話をして、じばりくせいで過ぎしてここにいた」

「精霊、ねえ」

ノエルは口に指先をあてる。考えるときの癖だ。

ノエルの世界には精霊は見えない存在としてある。高位の神官は言葉を交わすこともできるらしいが、どこまで本当かわからない。けれど精霊に力を借りる魔法があるのだから、どこかにはいるのだろう。けれど周囲から精霊の塔と呼ばれている塔の存在は知らない。

「……はどうなんだろ？……」

ミ力が周囲を見回してつぶやく。
それはノエルが聞きたかった。

第三話 一つの町

夜まで時間があるので、ノエルとミカはせめて人がいるところまで歩くことにした。このままでは野宿決定だ。見知らぬ人間と野宿など気が休まらない。

草原を抜けると街道があつたので、沿つてあるけば人のいるところに出るだろう。情報を交換しながら歩いたが、まるで内容が通じない。言っていることはよくわかるのだが、単語や国の名前とおぼしきそれらが、ノエルのそれと一致しないのだ。それにしても言葉が通じるのが不思議だ。

わかつたことは、ミカの年が19であること。なんらかの用事があつて精霊の塔に一人で足を運んだこと。用事の内容は、願いがあつたからだという。願いの内容は、はぐらかされた。

「村が見える」

しばらく歩いた頃、ミカが言った。

ノエルの視界にはまだそのよつた影は見えない。

「ほんとうに？」

「ほんとほんと。行こうぜ」

そう言つてミカはノエルの腕を引いて走り出す。

わかつたことは、さらににある。傭兵をしているというわりには明朗で気安い氣性で、こうして会つたばかりの正体さえ知らない人間に触れることを、いとわぬ人間だということだ。

しばらく走ると、ノエルの視界にもその影が見えた。確かにそれは村だった。

「目がいいのね」

「まあな！」

得意げに答える。

村は農業を生業にしていて、典型的な田舎の農村であるようだつた。村の周辺には肥沃な田畠があり、人影も見える。太陽が高度を

下げる、赤みを増した現在、野良仕事は終わりにせしかかっているようだ。

野良仕事をしている農夫と田が会う。隣のミ力に、自分と男が何を話しても平然としていると言い置いて、ノエルは農夫に近づいた。

「どうしたんだおまえさんら。見ない顔だなあ」

言葉は通じる。

内心安堵しながら、顔には出さない。

「事故に巻き込まれて、道に迷つたの。ようやく街道に出でてこりまで歩いてきたのよ」

「それは大変だつたなあ」

「ここのあたりで一番大きな街はどこかしら？」

「そりや街道沿いのエラムの街に決まつてゐる」

「エラム……聞いたことがあるわ。この国の中では第三の都市くらい？」

「第三は言い過ぎだ」

農夫は笑う。

「第十くらいかねえ。でもこの村に比べたらそりや大きな街さ」

「そう。ここから歩いてどれくらいかしら？」

「お嬢ちゃんの足なら一日つてとこかね」

「一日。存外に時間がかかる。

「なら今日はこの村に泊まりたいんだけど。宿はあるかしら？」

「村長さんが家の別棟を宿にしてるよ」

「私たち、事故でお金もなくしたの。持ち物を売るか仕事をしたいわ。質屋か、あるいは日払いの仕事は……この時間じゃなさそうね」

「そりやなあ。仕事なら山ほどあるが……特にそっちの兄ちゃん、腕に覚えがあるならこのあたりに出る魔物とか倒してほしいけど、この時間じゃねえ。夜になつたら危ないしな。質屋なら、骨董趣味の親父に聞いたらしい

「ありがとう」

農夫との会話を切り上げて村へ入ると、やはり長閑な景色が広がっていた。

「すげーな、ノエル」

「言葉が通じたのと、人種がそう違わないのはよかつたわ。おかげでこの国の人間らしく振る舞えたもの」

ノエルの世界にも人種の異なる人間や、言語が異なる人間はいる。ノエルとミカは、多少の差異はあれど異彩を放つほど浮いてはいいない。

農夫に紹介された骨董趣味の親父がいるという家。訪ねると、偏屈そうな親父が顔を出す。農夫に話したような事情を話すと、親父はものを出せと言つてテーブルを叩いた。ノエルは付属大学の学生の証である、国証が刻まれた魔法石を置く。

横からミカが小声で聞いてくる。

「いいのかよ」

「ここでは意味のないものだわ。それに、事情を話せば再発行してくれるでしょ」

親父は魔法石を手にとつてじろじろと眺めたあとで、懐からいくつかの石を出した。石に見えたそれは、鈍色の光を放つ、おそらくは貨幣だ。ノエルの知る銀貨や銅貨ではない。

「どうだ？」

親父が聞く。

「私たち事故に巻き込まれて困っているの。その事情、少しは察してくれてもいいんじゃない？」

親父は顔をしかめ、けれどノエルのその手に、銀の光を放つ貨幣を落とした。

「これ以上は出せん

「ありがと。でも私たち、これからヒラムまで旅をしないといけないから、悪いんだけど両替して」

親父は無言で銀貨を取り上げると、重量のある袋をノエルの手に下ろした。

「袋はサービスだ」

「ありがとう。恩に着るわ」

「ありがとな、おっさん」

ノエルとミカは礼を言つて親父の家を出る。

農夫に紹介されたもうひとつ、村長の家を訪ねて事情を話し鈍色の塊を出すと、快く別棟を貸してくれた。

村長の妻の手料理をいただき、ようやく部屋に落ち着くと、すでに太陽は沈みかけていた。

「もうすぐ夜だけど、なにがわかるんだ？」

泊まる部屋は別だが、ノエルはミカをこの部屋に呼んだ。これから判明するひとつの事象を、ともに確認するために。

「なればわかるわ。今日は雲もないから、すぐにわかると思つ」

ノエルは窓辺に近寄る。太陽はすっかり沈み、あたりは暗闇に包まれようとしている。家々には明かりがともり、団らんを囲む賑やかな声も聞こえる。

空を見上げたノエルは、予想していたその光景に、脱力したように壁に寄りかかる。

「ノエル？」

「見て、空」

ノエルが指さす暗い空を、ミカも見上げる。

「なつ……」

ミカは言葉を失う。

やはりミカもまたこの光景を初めて見るのだ。

「なんで、月が二つ……？」

青白く光る丸い月が、ふたつ。

明かりを落とした部屋に月光が落ちる。それは、ノエルの知る月光よりも強く明るい。ノエルの世界には、月はひとつしかないからだ。

「ミカの世界も、月はひとつ？」

「当たり前だろ！月は、そりゃひとつだな」

「でも一つある」

「錯覚とかじゃないのか？これって」

「こんなにはつきりした錯覚はないわ。この世界は……」

世界、海、境界、一つの太陽、一つの月。

魔法研究にはさまざまなものがある。

古代文字、古代魔法、精霊魔法、治癒魔法など、あげればきりがない。

その中に、異界の研究が存在する。

繭のようにつむに世界を包むその向こうは、海のような混沌が広がっている。その境界を越えると、そこは別次元の異界。

ノエルは馬鹿らしいとも、無駄な研究だとも思わなかつた。どんな研究にも意味はあるからだ。なんとなしに論文をひとつ読んだことがあるので、興味をひかれることも、調べることもなかつた。

あの古代遺跡が、異界の研究をしていたならば。

あの広間の岩と燐台、そして魔方陣は、あるいは転送陣を構成する要素たち。偶然にもノエルが燐台の文字を読み上げたことで、術が発動したとすれば。

「この世界は、異界なんだわ」

第四話 討伐

「おはよう、ノエル」

支度を調えて部屋を出ると、廊下の壁に背を預けたミカがいた。昨夜一つの月を見た後、ミカは部屋に戻った。ミカとて動搖していたのだろう。当然だ。異界などといつ存在するかどうかすらあやふやだった場所へ来てしまったのだ。

帰ることができるのか。

元の世界はどうなっているのか。

不安なことだらけだ。

冷静に結論を下しながら、ノエルもまた動搖していた。

もう一度と、ラインハルトや友人達と会えないかもしれないのだ。
彼にも。

早めに寝てしまつたノエルだが、起きたのはそう早くなかつた。疲れていたのかもしねりない。

ミカも落ち込んでいるだろうから、出立は遅くなるかもしねりないと思つて扉を開けたのだが、田の前のミカからは落ち込みや悄然さを感じない。

「……おはよう」

遅れて挨拶を返すと、ミカは朗らかに笑つて、村長の妻が食事を用意してくれていると言つた。

連れだつて歩きながら、ノエルは切り出した。

「落ち着いているのね」

「そんなことねえよ。でも騒いでもどひよひつもないし」

「そうね、確かに」

別棟を出て食卓に顔を出すと、ふくよかな村長の妻が笑顔で迎えてくれた。テーブルにはあたたかそうな食事が用意されている。ノエルの世界の食事とは、主食や食材が異なるが、食べられないわけでもない。

ミカと二人で食事をしていると、村長が顔を出した。

「おはよ／＼ござります」

金は払っているが世話になつてゐる手前、挨拶を交わす。

村長は笑顔で答えて、食卓に座る。ノエルとミカの食事が終わつたころを見計らつて、村長は切り出した。村長の妻が飲み物を運んでくる。

「実は折り入つて頼みがあるのです」

「頼みですか？」

村長はうなずく。

「お二人はこれからどうちらへ？」

「エラムへ行きます」

農夫に聞いた、このあたりで一番大きな都市。何にせよ、まずは情報収集をしなければ始まらない。

「ここ最近、近隣に魔物が出るようになりました」

「魔物？」

「小物の魔物ではありません。獣型の、身体もおおきいやつで凶暴な気性を持つています。農夫が何人もやられてゐるのですが、国の騎士団に上申しても何の音沙汰もありません。状況が状況ですから、忙しいのだとは思いますし、こんな小さな村にかまつてゐる暇はないのだと思います。でも、すんでいるあたしらにしてみたら……」

村長が苦しげにうめく。

ノエルとミカは顔を見合させた。

「もちろん報酬はお支払いいたします。そちらの方は、傭兵とお見受けします」

村長の期待に満ちた視線がミカへ注がれる。ミカはうーん、と困り切つた様子でノエルに視線を向け助けを求める。

「頼まれているのはあんたなんだから、私は知らないわよ」「時間がかります？」

ミカは村長に聞いた。

「魔物が頻繁に出没する場所はわかっています。早ければ一日で

「ノエル、いいか？」

「あなたの腕ならすぐ終わるでしょ。その代わり」

ノエルは村長を見据える。

「終わつたら、私たちを馬車でエラムまで送つてくれませんか？」

「それはかまいません。馬車ならエラムまでは一日でつきます」

「決まりですね。それで、魔物とやらはどこに出没するんです？」

ノエルが身を乗り出す。

「南東にある森です。村の若衆が案内します」

「そうですか。ならさつそく準備をして出発しましょ！」

「ノエルも行くのか？！」

ミカは驚いた声をあげる。

村長も同様だつた。ノエルは残るものだと思つていたようだ。

「私も結構やるわよ？」

学生兼研究者ではあるが、実践魔法もかなりの腕だと自負している。

ミカはノエルを困つたように見つめて、うーんとうなつていたが、ノエルの意志が固いのを見てとつて諦めた。

「こんなところに残されても情報収集はできなさそうだし。魔物つてのも見てみたいしね」

いくつか準備を整えて村を出、若衆の後ろを行きながら、ノエルは言った。

「魔物見たことないのか？」

「私の世界にはいないもの。似たようなのはいたけど、あれは人為的に作られたものだし。ミカは知つているの？」

「俺の知つてる魔物と同じのかはわかんないけど、元いた世界にもいたからさ」

前方に森が見えてくる。

若衆の青年達が立ち止まり、目の前の森を示した。

「あれが南東の森です。魔物はある森から作物を荒らしに出てくるんです。豚や牛を殺して持つて行つたりと……暮らしが成り立ちま

せん

「わかりました。ここまででいいです」

ミカが言つと、青年達は口々に頼みの言葉を口にして村へ走つて
いった。

その姿が視界から消えた頃、ミカはのんびりとした歩調で歩き出
す。

「ノエルも戦えるなんて意外だな」

「剣や徒手空拳で戦うわけじゃないわ。魔法よ

「森を焼くなよ？」

「そこまで馬鹿だと思う？」

ミカは思はない、と笑つた。

「ノエルの世界にいる人為的に作られた魔物つてのは、どんなのな
んだ？」

「今はいないわ。悪い魔女がいたの。小さな国に取り入つて、その
魔法でどんどん国を大きくしていった。自分の影を獸に取り込ませ
て、凶暴にしてほかの国で暴れるようにしたり、大地の力を奪つて
作物をとれなくなるようにしたり。どんどんその国は大きくなつて、
周りの国はみんな恐れていた。冷酷で享楽的な王が諸悪の根源だと
思つていたんだけど、その王もまた、魔女の影を取り込んでいたの」

「今はいないのか？」

「いないわ。倒したから」

ノエルの世界には、かつて北の大帝国・デル＝イルマシェが存在
した。王の傍らに立つ皇后、それこそが魔女だった。かつて北の魔
女と呼ばれ、東西南北に配された魔女のなかでもっとも父神に近
く、力のあつた存在。人々に知恵を受けた魔女が、なぜその存在が
歪んでしまつたのかはわからない。

「どうやって？ つーか誰が？」

「さまざまな力を借りて、私とほか数名が」

東西南の魔女。そして父神が世界に残した力を借りて、ノエルと
ほか数名が北の魔女を倒したのだ。

「ノエルが？！すげえ！」

ミ力は素直に感嘆する。

「私は巻き込まれただけだけどね。私にとつての諸悪の根源はラインハルト ボンクラ幼なじみよ」

幼い頃からともに遊んだ仲だ。悪口の内容なら一晩語つても語り

終わらない。

「ノエル」

ミ力が立ち止まり、剣を抜く。銀色に光る刀身。刃こぼれのない、美しい造形。

「いるの？」

「いるみたいだな」

日光を遮る高い木々のために、辺りは暗い。

ノエルは頭の中で風の魔法を構成する。炎はもちろん論外だ。

「くるぞ！」

茂みから飛び出してきた獣。しかし野生の獣にはない気性の荒さと、瞳の冷酷さが、それが通常の獣でないことを示している。

ミ力が剣を振るう。魔物はたじろいで勢いをそいだ。

ノエルが頭のなかで構築した魔法を展開する。

風を、魔物の周囲に具現させる。

（切り裂け……！）

頭の中の構築どおりに、それは魔物の身体をかまいたちのよう切り裂く。

魔物の断末魔が響く。ノエルはさうにその首に、刃物のような風を展開した。

「な……！」

魔物が切り裂かれ、絶命する。目の前でそれを見ることとなつたミ力は、驚いて声を失う。

猛然と振り返ると、目の前を指をしてノエルに問う。

「こ、これ、ノエルが？！」

「そうよ。私の魔法。結構やるでしょ」

「結構つづーか、恐ろしいほどつづーか……。魔法つて、呪文とか魔方陣とかいるんじゃないのか？」

「そういうのもあるわ」

たとえば、ノエルをこの世界に連れてきた魔法は、魔方陣と古代文字、媒介を必要とする高度な魔法だった。

「試してみる？」

ほほえんとミカに手を差し出すと、勢いよく首を振られた。

「冗談よ」

ノエルは肩をすくめた。

村長はよほど魔物のことで悩んでいたのか、涙を流して礼を言つた。

農夫や若衆に一晩泊まつて宴に参加してくれと言わたが、それを断り、そのままエラムへ向かうことにした。

ノエルは肩をすくめた。

＊＊＊

倒したという証拠のために村に運ばれた魔物の死骸は、若衆によつて運ばれ森に放置された。確認できればそれでよかつたし、村に置いたままでは女子供が気味悪がるし、悪い気を呼んでしまいそうだ。死骸はいつか朽ち果てるだろう。

若衆が去った後、死骸の口からは黒い粘土状のものが流れ出した。それは一つにまとまり、地面に影のように映し出される。死骸の周

囲をぐるりと一周した後に、それは北の方角へ一直線に進んだ。

残された死骸は、肉が蒸発するように溶けた後、骨だけをその場に残した。そこにはしばらく、ほかの動物も近づかず、植物さえ生えなかつた。

第五話 ハラム

ノエルとミカを乗せた馬車は、一路ハラムへ向かう。

休憩のために途中、最寄りの町に宿泊すると御者から話があった。

「一日間歩くより気楽な旅だ。

「ミカはどうするの？」

「どうするつて？」

馬車の中、ノエルとミカは向かい合つて座つていた。

「いろいろありすぎて忘れていたんだけど、あんたがこれからどうするのか聞いていなかつたと思って」

「これから？ ハラムに向かうんだろ？」

「それは私が決めたこと。あんたは別に、私に従う義務はないでしょ？」

ノエルとミカはあるの草原で出会い、ともに異界に迷い込んでしまつた同士というだけの関係だ。

ノエルは元の世界に帰るために情報収集をするつもりだが、ミカがどうしたいのかは聞いていなかつた。聞く暇がなかつた。

「ミカはどうしたいの？ 元の世界に帰りたいの？」

ノエルは帰りたいが、ミカもそうだとは限らない。たとえば元の世界でつらい目に遭つていたり、苦しいばかりなら、帰りたくないのかもしれない。

ミカは中空を見上げてうーんと首をかしげた。

「俺は傭兵だつて言つただろ？だから俺を待つている人も、帰りたい場所もないんだよ。だからノエルみたいに帰りたいとはそう思えない

ない

「なら、私に同行する意味はないんじゃない？」

「確かにない」

「でも、とミカは言つ。

「やることもないし。ノエルが嫌じゃなければ、ついて行ってみた

い

「どうして？」

ノエルは不審に思う。

「やることがないから。それに、どうしてノエルがこの世界にきたのか、興味があるからわ」

ミカは明朗に答える。

その答えを聞いて、ノエルは内心安堵する。

けれど素直に言えるほど、ノエルの性格はまっすぐではなかつた。
「……嫌じやないから、ついてきてもいい」

ミカは笑つて、ありがとうと言つ。

そう言いたいのは、ノエルの方だ。

おそれらくミカが同行しないと言えば止めないが、不安にはなるだろつと思つた。ミカがなにを望んでいるのであれ、異界で出会つたこの異邦人は、ノエルにとつて同士とも言つべき存在だ。

元の世界に帰ることを望まないミカは、ノエルから離れればこの世界に溶け込む。気性も気安く剣の腕も立つミカは、きっとすぐに自分の居場所を見つけるだろつ。けれどノエルはそうはいかない。異邦人であり続けるノエルに、この世界での居場所は作れない。だから同行するといつミカの申し出に、心の底から安堵した。

一度休憩のために小さな町に寄り、次の日にはエラムに到着した。御者と別れ、エラムの街に入る。

農夫が言つたように、エラムは大きな街だつた。あの村と比べようもない。ここが第十の都市だというのだから、この国はそれなりに豊かで領土も大きいのだろう。

「どこに行くんだ?」

「情報収集といえば?」

尋ねたミカに、逆に問い合わせる。

「……ひとが集まるところか? 食堂とか酒場か?」

ノエルはうなずく。

「まずは食事にしましょ」

ノエルは歩き出す。その隣に並んだミカは、そう高くない位置にあるノエルの頭を軽く叩いた。

「ノエルには迷いがないよな」

「迷つてたつて仕方ないもの。やることはさつせとやらないと
「すこなあ」

ミカは感嘆する。けれど頭をなでるその手が、自分を子供扱いしている気がして、それを振り払つ。

「子供扱いしないで」

深い青色の、強い瞳。

「……悪い。ごめんな」

「別に。さ、行くわよ」

この街に頻繁にきているらしい御者に、おすすめの食堂を聞いていたのだ。ノエルはそこに向かつた。

御者のおすすめの食堂、春の木陰亭は夕食時ということもあり人々で賑わっていた。

「いらっしゃいませ!」

あいているテーブルにつき、明るい店員に食事を頼む。

食堂の客は、まだ時間が早いためか情報に長けていそうな風貌の人間はない。

「遅い時間にまた来るべきかしら」

「酒はだめだぞ。16なら未成年だろ」

「この国での成人年齢が20とは限らないわよ」

「俺の世界つつうか国だと18だつたな。国によつても違つけど」

「ま、お酒は好きじやないし、飲みもしないけど。あんたは？飲めるの？」

「……聞かないで」

弱いらしい。トライウマもあるのか。

店員が食事を運んでくる。それを口に運びながら、会話を続ける。「でも何にせよ、今後の予定もあるし、なにかしらの情報はつかんでおかないと。いつまでもここにいることになるわ」

「情報つづつたって、たとえばどんな？」

「たとえば……そうね」

ノエルは少し考える。

「たとえば、私たちがここにきたと同時になにかこの世界に変化が起つたとか、同様の事象が、伝承であれなにか残つていなかとか、あとはこの世界の情勢ね。私たち、いまだにこの国の名前や政治形態も知らないのよ」

「変化、か……」

ミカが周囲を見回す。

がやがやとやかましい店内。くるくるとよく動く店員。世界は違えど、景色はノエルの知るものとそう変わらない。

この世界はノエルの世界に似ている。異界となれば、知的生命体が人型でないとか、生活形態が異なるとか、食べるものも、身体に備わる免疫も、そのすべてが異なつていてもおかしくない。

けれど周囲の人間はノエルとそう変わらないし、性別も男と女だけのように思える。食事も三日前からこの世界で食事をしているが、体調を壊すこともない。この異様なほどの同質さ。そして言葉が通じる不審。このあたりも絡んでいるのかもしねり。

自分の思考に沈み、食事の進みが目に見えて遅くなつたノエルを見て、ミカが苦笑する。

「ノエルはよく自分の世界に入り込んでるよな。研究者つてみんな

そんなんのかな。俺の知ってる魔法の研究者も、ノエルと同じよう

うに自分の世界によく入り込んでた」

ミカのからかいに、ノエルは「うるさいわね」とだけ答えて食事を再開した。

「お嬢ちゃん、魔法の研究者さんなのかい？」

「え？」

話しかけてきたのは、隣のテーブルの男だ。酒に酔つていらしく、その顔が赤い。

「魔法の研究者って聞こえたからさ。」うちの兄ちゃんはどう見ても魔法使いじゃなさそうだしねえ」

「そうよ。魔法の研究者」

ノエルは肯定する。

「年若の研究者さん、この異変はいつ解決すんだい？」

男と同じテーブルにつく、別の男が話に混じってきた。

異変？

ノエルとミカは顔を見合わせるが、表情には出さない。

ノエルは話を合わせる。

「さあ。どうかしら」

「どうかしらって。あんたらみたいなのが一番大変だろ、お得意の魔法が使えないんじゃさ。俺はこないだ王都まで行つてきたが、そりや混乱してたぜえ。様子見るために魔法関連の施設もよううつと思つたんだが立ち入り禁止でよ」

「なに？」

ノエルは問い合わせる。

「魔法が使えない？」

「だから、王都の魔法関連の施設が関係者以外立ち入り禁止でさ。研究者達もすぐに収まるとか、一時的なものだと、天災のようなものだ、とか言つてたけど、使えなくなつてからもう半年だぜえ？王都の大通りの永年魔法街灯なんざちょっとした観光スポットだったのによ、ぜーんぶ真っ暗」

問い合わせたのはそこではない。だが、異変はわかった。

最初に話しかけてきた男やそのテーブルとともにしていた男だけではなく、ほかの人間も混ざって話は大いにふくれている。

ノエルはミカに身体を寄せ、そつとささやく。

「異変。どんぴしゃだつたわね」

「……俺たちのせいなのか？」

ミカが顔色をなくしている。

ノエルは、なぜミカがこのような反応をするのかわからない。

「ち、違いでしょ。異変は半年前から。私たちがきたのは三日前よ」

「そつか、そう、だよな」

「とにかく、大いに収穫はあつたわ。食事が終わったら宿に引き上げましょう」

ミカは若干顔色を取り戻した顔で、うなずいた。

第六話 異変

宿に戻ったノエルは、寝台の上に座つて手のひらを中空にかざした。

そこには白い光がふわりと浮かぶ。

「使えるわよね」

明かりをともす、簡単な魔法だ。

「そもそもあの森で豪快に使つてたじやん」

魔物相手に、風の魔法を炸裂させた。わずか昨日のことだ。

「そうよね」

明かりを消し、そのまま後ろの寝台に寝転がる。

「この世界のひとが、魔法が使えなくなつた原因はなにかしら」

「それがわかつたら、研究者の人たちも苦労しないと思つ」

「そうね。王都とやらは混乱しているようだし……」

「まさか王都行くのか？」

「最終的には行きたいわね。やつぱり王都とやらが一番研究も進んでいるんでしょうし。でもしばらくはこの街で調べるわ。色々まわつてみるから、ミ力も行きたいところがあれば行つていいくわよ。移動用の路銀以外は折半つてことで」

「それつて別行動するつてことか？」

「私の調べ物はミ力にはつまんないと思つし」

ミ力が元いた世界には魔法が存在したが、ミ力自身にはその素養がない。ノエルの調査は異変の中心である“この世界の魔法”についてになるだろうし、ミ力には理解できないことばかりだろう。

同行すると言つてくれたミ力だが、四六時中共にいる必要はない。寝る部屋だけは別だが、昼間にも一人でやりたいことがあるのではないだろうか？ たとえばミ力とて健康的な男子であろうし、女とか。「でも危険だぞ？」

「私の強さはあの魔物で分かつたでしょ」

「異変が起じていてるのにノエルが魔法使えたし、騒ぎにならんじやないか？」

「そんなへますると思ひへ。」

ミカは苦笑する。

「そうだな。でも心配だし、同行をやめてよ」

「ま、いいけど」

翌日、ノエルとミカは連れだつて街へ出た。

「宿屋の店主に聞いたら、この街にはギルドがあるんですつて。行ってみましょ」

「ギルド？ 大丈夫か？」

「国際情勢に強いってつたら彼らでしょ。できれば魔法使いに接触したいのよね。私の使う魔法どこが違うのか知りたい」

「うまくいくかな」

「いかせるのよ」

宿屋の店主に、やめた方がいいのでは、と言わながら聞き出したギルド。街の中心部から離れた区画にあるそこの周辺は、お世辞にも育ちがいいとは言えない輩がそこかしこでしかめ面を晒している。腰に剣を佩いたミカはともかく、小柄な少女のノエルはどうにも浮いている。

「お嬢ちゃん、来る場所間違つてないかい？ 商店街はあっちだぜ」
強面の男が話しかけてくる。指さす方向は街の中心部。

「間違つてないわ。ところであなた魔法使いの知り合いいない？」

小柄な少女が臆することなく言うので、男は驚いた。

「異変を知らないのか？」

「知つているわよ。その件で、魔法使いに聞きたいことがあるの」「奴らは魔法が使えない以上役立たずだ。ここいら一帯からは姿を消してるよ」

男は肩をすくめる。

「役立たずの魔法使いに何の用だい？お嬢ちゃん」

「お嬢ちゃんはやめて」

意地の悪い大人を思い出す。

「私は魔法の研究者なの。魔法使いに色々と聞きたいことがあるの」「研究者？へえ、そりゃまた。で、この異変は解決できそ'うなのかい？」

「調査中よ。でも魔法使いがいらないんじや仕方ないわね。ありがとう、他をあたるわ」

男に別れを告げる。しかし面白そうな顔をした男がそれをとめた。「待ちなよお嬢　いや、小さな研究者さん。情報提供料はないのかい？」

ノエルは半眼で振り返る。

「そうね……」

「ノエル」

ミカははらはらとした顔でノエルと男を見る。

剣の腕は立つだろうに、情けない顔だ。大丈夫だと伝えるために、小さく微笑む。

「情報提供料を渡すなら、もつと情報をいただくことになるけど」「どんな？」

「世界情勢。研究者といつてもモグリなの。知りたいことは山ほどあるわ」

「世界のすべてを知つてゐわけじゃないが、俺が知る、研究者さん

に伝えられる限りのことは提供してもいいぜ？」で、提供料は？ 提供料の交渉をする。この国の貨幣価値はすでに把握済みだ。つまくまとまとたところで、男があまり清潔ではなさそつな食堂に誘つた。清潔ではないが味はいいと言つ。ちょうど毎食時だ。男の提案に頷き、ノエルとミカは男のあとについて食堂に入った。

「ミカ。いざとなつたら頼むわよ」

小声でミカに囁く。

ミカは頷いてノエルの頭を軽く叩いた。

男はフェルと名乗つた。職業は傭兵。

「で、どこから話す？」

フェルは切り出した。

「まずは異変後の魔法使いの行方」

もつとも知りたいことだ。

「魔法使いの行方が。異変の直後は、すぐに収まるだらうつう国の発表を信じてた。ま、信じようとしていたつてのが正しいか。だけどそれがひと月になつた頃……」

最初は同情していたギルド仲間も、次第に役に立たない魔法使いをもてあますようになる。いつしか魔法使いは、ギルドを去り、独自に調査をはじめるようになる。再び魔法が使えるようになれば、この状態も解決する。

「自然な流れね」

「そうだな。だがそつまくことは運ばない。この魔法大国リーズヴェントの頭のいい富庭魔法使いさえ解決できないんだ。ギルドの魔法使いに解決できるわけがない。多くは王都に行つた。王都では職にあぶれた魔法使いの保障や職探しの支援をしてるからな」

「王都で保障をしてるのね……なるほど」

「やり手の王子殿下の提案を。病身の国王に代わって政務のほとんどを行つてる」

王子の名はエドヴァルト・ヒリート・ハイム・コングリング。コン

グリング王家唯一の子。

「だがエドヴァルト王子は庶子。だからシェフィールド王家が自分とこの男児を王について画策してる。だがこれまたシェフィールドの子が病弱でな。他の王家筋には男児がない。現在王宮ではユングリングの庶子王子とシェフィールドの病弱王子の対立になつているな。ま、本人達がどうだかは知らないが」

「大変ね」

リーズヴェント王国には王家はひとつではない。現在、王冠を戴いているのはユングリング。しかしエドヴァルト王子が死ねか、あるいは執務が不可能な状況になれば、王冠はシェフィールドの男児に移る。

「まったくだ。海の向こうのニールだつてきな臭いのになあ」

リーズヴェントは北の大陸全土を領土としている。北大陸は中央大陸の四分の一にも満たない大きさだが、国の領土としては大きい。だが北部の領土は険しい山と渓谷、そして雪と氷に支配され、ほとんど開発はされていない。街は中央部から南部にかけて集中しており、人口もまた同じだ。ここ、エラムは南東部の街。王都はここから街道を西に進んだ大陸中央部にある。

四方を海の囲まれているため領土問題はないと思いきや、海の向こう、中央大陸北部の国ニールと海の領有権争いの真っ最中。

「研究者さんも王都に行くのか？」

「王都へは行くわ。別に保障目当てじゃないし、職もいらないけど。だけど魔法使いには接触したい」

「なるほどな。なら王都へ行くのが一番かもな。研究者さんと違って保障と職目当ての魔法使いが溢れてる。だからこの街にはそういうない」

ほかにも他国の状況と情勢、この国の世論や現在執務を取り仕切っている王子の政治の方向性を聞き出し、夕暮れが近くなつた頃にフェルと分かれた。

「ありがとう。博識なのね、助かつたわ」

「いやいや、研究者さんも小さいのにかなり突つ込んだ質問していく

るから驚いたよ

「小さいは余計よ」

ノエルは不機嫌そぞろに言つ。

フェルは笑う。

「いやすまん。といひで最後にひとつ、名前を教えてくれないか？」

「私はノエルよ。こつちはミカ」

「ミカでーす」

ほとんど聞いているだけだつたミカは、若干眠そうだ。

「ノエルか。また会える日を楽しみにしてるぜ」

驚いて何も言えないでいるうちに、フェルは人混みの中に姿を消した。

「……傭兵にしては変な奴だつたわね」

「そうだな。博識だし。なんで王宮の対立図なんて知つてんだろ」

「さあ？でもいろいろ聞けてよかつたわ。しばらく仕事をしてお金貯めて、王都に行きましょ。現状だと路銀足りないし」

「んじゃギルド行ってみるか」

「そうね」

ノエルとミカに任せられたのは、あまり実にならない仕事だった。最初から金になる仕事がくるとは思っていなかつたが、あまりにも実にならなすぎる。それでも街中で通常に稼ぐよりは実入りはいいので仕方がない。

新顔だからという理由もあるが、自分の存在も大いにあるだろうと、ノエルは思う。小柄な少女にしか見えない自分は、ギルドの仕事をできると周りには思われないだろう。異変がなければ魔法使いとして重宝されたかもしれないが、現状で魔法を使えば騒がれる。それはノエルの望むところではなかつた。

「これで終わり、と。それじゃ報告しに行きましょ」

「簡単だつたなー」

ミカも物足りなさそうに呟つ。

ある程度こなせば仕事も質も違つものになるだろつか。

エラムへ戻り、ギルドへの報告を済ます。次に提示されたのは、この季節、街から近い山間部に大量発生する獣の駆逐。繁殖時期に重なるため雄は特に凶暴になつており、山間部の道を通る商隊などを襲うことがある。

次の日、朝早くに山間部の指示された地点に足を運ぶと、すでに先客がいた。

「また会つたな、小さな研究者さんとその連れ」

獣の血に濡れた剣を下ろし、そこに立つっていたのはフェルだつた。

「ミカだよ」

「そろそろ、小さな研究者さんはノエルだつたな
腕を組んだノエルは肩をすくめる。

「お前らもティガの退治か?」

ティガという獣が、今回の駆逐対象だ。

小型だが爪と牙の鋭い、凶暴な獣。

ミカがそうだ、と頷く。

「ミカはともかく、ノエルも？」

「何か文句でも」

フェルの問いに鼻を鳴らして答えるが、フェルの疑問ももつともだ。

ミカは剣を帯刀しており、発達した腕からも剣士であることが伺えるが、ノエルは小柄で華奢な体型だ。剣に限らず武器を握るとも思えない。

「ナイフは下げるようだが、それで戦うのか？」

「そうよ。剣は重くて扱えないし」

街で購入したナイフは二丁。腰に下げている。

ミカやフェルが持つ剣は、ノエルには重すぎて支えられない。

「研究者じやなかつたのか？」

「研究者がナイフ使つちゃいけない道理はないでしょう」

ナイフを抜いて銀の刀身を朝日に照らす。安価なナイフだが、ノエルはこのナイフに魔法を込めた。ノエルにだけわかる、その光。

「お前らもつてことは、アンタも？ひとり？」

「俺は一匹狼なんですね。相手はでかい群れだから、他にもギルドの人間は来ているけどね」

この季節は他の人間と鉢合わせることもあるだろうと、依頼を提示したギルドの人間も言っていた。

「ここにはアンタに任せて大丈夫そうね。先に進みましょ、ミカ」

道の先に進むノエルとミカの背に、フェルが声をかける。

「気をつけた方がいい。今年のティガはいつにまして凶暴だ。異変のせいかな」

手を振ることで応え、ぽつりと溢す。

「例年のティガを私たちは知らないんだけどね」

「まあな」

道を先に行き、ティガの雄が好む匂いを身にまとう。わかりやすく言えば、ティガの雌が発情期に発する特有の匂いだ。人間の鼻に

は感知できない。

「いるな」

ノエルは頷くことで同意する。

ミ力が剣を抜き、ノエルもナイフを抜く。

「複数いるわね。気をつけてよね。治癒術は使えないから」

「おう」

道脇の雑木林に突っ込み、柴を避ける。そのミ力の横から、獣が飛び出してきた。

ノエルの知るイノシシによく似た獣 テイガ。イノシシに比べると少し小柄で、爪と牙が鋭い。興奮したその目は、赤く充血している。

「確かに繁殖期ってだけじゃなさそうね」

襲ってきた第二のティガを避け、その横腹をナイフで薙ぐ。

口の中で小さく知ある言葉を唱えると、驚異的な脚力でティガに追いつきとどめを刺す。魔法を込めたナイフ。そして身体能力を向上させる魔法。複数を相手にする以上悠長に脳内で魔法を展開、構築している暇はないだろうと、事前に準備をしてきた。ノエルがギルドの仕事についてこれるのは、このためだ。炎や氷、風を使うのではない、目立たない魔法だ。

振り返ると、ミ力がすでに第一のティガを倒していた。剣に付着した獣の血を払う。

「なんか変な感じがするな。繁殖期の野生の獣相手にしたこと、前にもあるけど……」

「そうね。なにかおかしい。異変の影響かしら」

ノエルは死骸を調べて考え込む。魔法を使えば、生命活動を停止してからそれほど経っていないから生命力からその流れまで見られるだろうが、この山間部にはフェルのようなギルドの人間も溢れている。見られてはまずい。

ミ力が剣で雑木林の先を指す。

「坂になつてるな。上に行つてみるか?」

「そうね」

途中、他のギルドの人間が倒したとおぼしきティガの死骸に遭遇した。

足を止めて死骸を調べるが、異変は見られない。

三度ほどティガの襲撃を受けた。ノエルのナイフと魔法で仕込んだ体術、そしてミカの剣でティガを屠り、坂を登る。だいぶ登った頃、視界が拓けた。

「わあ……」

思わず声が漏れる。

頂上ではないが、そこからは正面の地形が遠くまで展望できた。街を出たのは朝早かつたが、すでに日は中天にある。

「あれ、エラム？」

ノエルが、円形に広がる街並みを指さした。

「平原突き抜けてるのが街道か。あっちが王都？さすがに見えないけど」

「西だからそうね。山の向こうだから、見えるわけないわね」

「一気にびゅいーんと行けないのか？魔法で」

「転移魔法は難しいの。転移先がどこでも行けるってわけでもないし。それに、対象者は術者一人だから、アンタ置いてけぼりよ」

「嫌だー」

ミカが笑いながら首を振る。

ノエルは指で唇に触れる。転移魔法は難しいが、ノエルがこの世界に来る羽目になったあの魔方陣の構成は、明らかに転移魔法だった。内部で展開している要素が複雑すぎて、ノエルの手で再構成は無理だが、根底の構成は間違いなく転移魔法だ。だから難しいだのとは言つていられない。そのうち本腰を入れて検証しなくてはならない。

「ノエルさん。眉寄つてるぞ？」

ミカが指先でノエルの眉根をこする。

「な、なにするのよ」

ノエルが一步下がる。

「眉間しわ寄つてゐるから。んな顔するなよ。可愛いのが台無しだぞ」「可愛くないからいい。さて、早くあの山の向こうに行けるよ！」
「お金稼ぎましょ」

あの山の向こう 王都。

展望に背を向けたノエルを、ミカが肩を掴んで止める。ノエルが不審げな顔でミカを見る。

「なによ」

「待つた。あれなんだ？」

「あれ？」

視線でミカの指先を辿る。

山麓に広がる雑木林。これまでノエルとミカが登つてきた。
土埃だ。否、あれは。

「ティガ？」

それはティガの群れだった。

「まだあんなに……！」

ノエルとミカだけはない。フェルや他のギルドの人間もいる。だ
とうのにこの数はどうだろう。見下ろす山麓。そこに見え隠れす
る、ティガの群れ。一体一体はたいした大きさではないのに、この
群れの大きさはどうだらう。

「待てよ、あのまま行つたら！」

ミカが悲鳴のように叫ぶ。

ノエルがティガの進路を辿る。

「エラム……！」

ここからでは人影さえ見ない円形の街並み。

このままでは一刻もたたずティガの群れは街に突撃する。

ノエルとミカに仕事を持つてきたギルドの人間も、山間部に出没
するだけ言つていた。ティガが山間部に集まる理由は繁殖だ。街
に突撃する理由はない。そんな理由のないことを、野生の獣はしな
い。

「これも異変のせいだつていうの？」

エラムも異変を察知したのか、街の周囲がさざなみのよつに揺れている。おそらくはティガの襲撃に気づいた街の人間が騒いでいるのだろう。

「街に戻るぞ！」

ここからでは走つても一刻以上かかる。

ミカが先に走り出し、ノエルはそれを追つた。

＊＊＊

魔法で足を速めたが、辿り着いた頃には一刻はとうに過ぎていた。街の周囲はすでに、戦いの場となつていた。

多くの武器を持った人間がティガと対峙している。街の周囲にいた商人や一般人は、逃げ惑つている。

ティガは凶暴とは言つてもギルドの人間に敵わない獣ではない。だがあまりにも数が多い。

「国の役人はなにしているのよ！」

向かつてきたティガにナイフを投げ仕留める。

ティガに対峙している人間は、ほとんどがギルドの人間だ。この国とて騎士団や軍は持つているだろうに、この規模の街に常駐していないのだろうか。

「役人も耳が痛いだろうな」

「フェル！」

毒づくノエルに近づいた男は、山間部で出会つたフェル。すでに

何体ものティガを斬り伏せた剣は、その血に濡れている。

「エラムは辺境の中心だから、ギルドの方が力が強いんだよ」

「それでも、この襲撃に出てこないのはどうかと思うわ」

「まったくだな」

会話をしながらも、フェルは右から牙をむいたティガを斬り伏せ、ノエルは足下を狙つてきたティガを蹴り飛ばしてナイフでとどめを刺す。ミカはノエルのフォローをしながら、何体ものティガを切っている。

「強いな、二人とも」

「アンタも」

フェルは強い。

だがティガは、数で大きく勝っていた。

「きりがないわね……」

いずれ騎士団も出てくるだろうが、その前にギルドの人死にが出そうだ。一般人の避難も完了してはいない。

魔法が使えれば、と思つ。使えるのに使えないといつこの状況は、ストレスだ。

「ええい！」

投げたナイフをティガの死骸から抜き取る。

ミカとフェルが周囲にいたおかげか、このあたりはだいぶ片付いた。一息ついて周囲を見回す。

一般人の避難はあらかた完了したようだ。残っているのは足の遅い女子供。男達が必死に誘導している。しかし足がもつれたのか、母親に連れられた子供がその場に転倒する。

街に近づけまいとするギルドの人間達の間をかいぐぐり、ティガがその子供に牙をむく。

ナイフは間に合わない。ミカやフェルの剣も届かない。

(風)

構築し、展開する。

ティガの周辺に具現した風が、その足を切り裂く。痛みに倒れふ

しながら、獣はそれでも闘争を失わない。しかし速度はない。ノエルは走る。口の中で刀身に力を与える言葉を呴く。獣を屠り、その血で汚れた刀身は瞬く間に鋭さを取り戻す。

ノエルがティガにとどめを刺した頃には、子供は母親と共に街の方へ消えていた。

安堵のため息をつく。ナイフを抜いて血を払う。

こんな小さな魔法ではなく、大きな魔法で辺り一帯を掃討してしまいたい。だがそれはできない。ノエルは襲いかかってくる獣に對峙した。

第八話 レークエイナの騎士

エラム周辺に散っていた騎士団が戻ってきた頃には、ギルドの人間によつてティガはほとんど掃討されていた。これでまたこの街では騎士団の地位が弱まるだろうと、事後処理に追われる騎士達を横目に、ノエルは思った。

ティガ掃討に貢献したことで上乗せされた報酬を手に、ノエルとミカは宿に戻つていた。

「疲れたわ……」

「だな……」

朝早くから山間部に討伐に出かけ、昼には走つて街まで戻りティガの掃討に手を貸した。昼食は持つて出ていたから空腹というわけではないが、ただひたすらに疲れている。

ノエルとミカは、ノエルに宛がわれた部屋で、だらしなく身体を伸ばしていた。

「早めに夕食をとつて寝たい。お風呂入りたい」

「同感」

しかし無情にも、二人の当然の願いは唐突なノックによつて散ることとなる。

異界の人間であるノエルとミカに、訪ねてくるような知り合いはない。

ミカと顔を見合わせる。

用心深く剣をとり、ミカが扉に近づく。

「誰だ？」

「俺だよ、フェルだ」

ティガ掃討に手を貸し、いつの間にか姿を消していた男だ。

「小さな研究者さんはいないのか？」

「何の用よ」

ノエルが立ち上がる。扉は開けない。

「夕飯でも一緒にどうかと思つてね。少し早いが」

まだ日は赤くないが、一刻もすれば赤みを帯びるだらう。夕食には早いが、元々早めに済ませて休むつもりだった。

「ティガ掃討のとき、フォローしてくれただろ。ギルドの人間は恩は返すもんなんだよ。おごりよ」

どうする、とミカが目で問う。

正直油断ならない男だと思つてゐるが、おごりは魅力的だつた。それに、いざとなればミカも腕は立つし自分も腕には自信がある。寝台の横に落としていたナイフを腰に下げ、ノエルは扉を開けた。

＊＊＊

フェルがおすすめだと言つて案内したのは、街の片隅にある小さな食堂だ。まだ時間が早いためか、他に人はいない。頑固そうな親父がカウンターで腕を組んでいる。

その親父に三人前の定食を頼み、先に出てきた飲み物で乾杯した後、フェルが切り出した。

「今年のティガはやつぱりおかしいな。騎士団もようやく重い腰上げて調査に乗り出したらしい」

「へえ。ギルドでは調べないので？」

「とつぐに調査中だ。だが魔法使いがいなくてうまく進んでない。魔法使いは、獣の生態にも詳しいのが多かつたし、奴らがいればことは簡単だったのかかもしれないが」

だがいないもんは仕方がない、とフェルは肩をすくめた。

「ギルドの人間に、獣の生態に詳しい奴はいないのか？」

ミカが問う。

「いる。だが数が少ない。ノエルはどうだ？」

「生物や生態は専門じゃないわ」

そうしていりつちに定食が運ばれてきた。愛想の欠片もない店主だが、味はいい。さすがにフェルはこの街のことをよく知っている。「ノエルはどこで魔法を習得したんだ？ 学院か？」

この国、魔法大国を冠するリーズヴェントには、魔法使い養成を目的とした学院があるらしい。

ノエルの故国リーズヴェントにも学校は存在する。だがノエルは学校で学んだわけではない。

死んだ両親が魔法の研究者だった。それを継ぎよつに魔法を習い、研究者となる道を選んだ。基礎的なことは両親から教わったが、まだ幼い頃に死んだために、応用は独学だ。そのうちに王国の田にとまり、付属大学へ籍を置くことを勧められた。

「親よ

「親に？ さて高名な魔法使いなんだろうな」

「死んだわ」

ミカとフェルの表情が強ばる。

「気にしなくていいわ」

ノエルは肩をすくめる。幼い時の話だ。両親のことをいまだに引きずつていては、生きていけない。

「いや、悪い。だが生前は名のある魔法使いだつたんだろ？」

「そうでもないわ。モグリだつていつたでしょ」

嘘だ。ノエルの両親はリュシングスでは名の知れた研究者だった。だがこの世界で名が知れているわけがなく、否定するしかない。

「なんでモグリ？」

「知らない」

細かいところをはぐらかしながら会話する。

「ところで、ミカはどうして一緒に行動しているんだ？」

ミカが肩を揺らす。

もう少しポーカーフェイスといつもの身につけてほしいと、ノエルは思う。

「ミカは私の親に引き取られたの。それ以前の経歴は知らないわ」

「へえ？」

フェルの視線がミカに移動する。

「……魔法で強制転移されたんだ。それで、ノエルとノエルの親に助けられたんだよ」

ポーカーフェイスが苦手にしては経歴の口上が巧い。

これからも自分とミカの関係はこれまで一樣、とノエルは密かに決めていた。

「強制転移？そりや穩やかじやないな。誰の仕業なんだ？」

「それがわかりや苦労しないよ」

ミカが肩をすくめた。

「恋人同士じゃないのか？」

ミカが飲み物を吹いた。

少しかかつてしまつたそれを拭い、ノエルは首を振る。

「違うわ。そんなふうに見える？」

「仲がいいとは思うね。まあ、恋人同士って感じじやないか。じゃあ俺にもチャンスはあるのか？」

意味深な視線を、ノエルに寄越す。

「少女趣味なの？」

フェルがむせた。

「なんでそうなる！ノエルはもう15、6だろ？」

「16よ。でもアンタは20越えてるでしょ？」

「24だ。8歳差なんてたいしたことないだろ」

8歳差。この国ではおかしくない年齢差なのだろうか。

あの意地の悪い大人とは、9年の差がある。この年齢の差はなにをどうしようと縮まらない。

「どうした？ノエル」

茫洋とした表情で思考を飛ばすノエルに、ミカが声をかける。

「……なんでもない」

今はあの意地の悪い大人のことを考えている場合ではない。

「それで、俺にチャンスはあるのか？」

話はまだ続いていたのか。

「ないわ」

食事が終わる頃には、食堂に半分ほど人が入っていた。食事を終えたフェルが、この後どうする、と言つた。

「どうするつて？」

「食事の後なら、酒しかないだろ」

「もう飲んでるじゃない」

フェルの飲んでいるものは、琥珀色の液体。ノエルにはおいしさのわからない飲み物。

「こんななんじや飲んだとは言えないさ。いい店があるんだ。行かないか？」

「行かない。好きじゃない」

「なら軽い果実酒でも飲んでいればいいさ。あれは甘いし。ミカはどうだ？」

「やめとく」

ミカが暗い表情で首を振る。

本当になにがあつたのだろう。

「一杯くらいいいだろ？いい女もいるぞ」

「いや……」

ミカは及び腰だ。

「別にいいんじやない。私は一杯果実酒飲んだら一人で帰れるし」

「だめだろ。危険だし」

「私がいたら綺麗なおねえさんと遊べないでしょ？」

「ノエル。そんなことどこで覚えた」

「意地の悪い大人が言つてた」

「それはいつぺんしめといった方がいいと思つぞ」

そうね、とノエルは笑つて頷いた。

食堂を出てフェルのおすすめだという酒場に向かう。食堂にも無論酒はあるが、フェルの好きな酒がないのだという。それに、酒場の方が種類が豊富だ。

すでに街は闇に沈んでいる。街頭がついていないために、闇が濃い。

「リーズヴェントは魔法大国だ。だからあらゆるところで魔法を糧としてる。あまりにも魔法に頼りすぎた代償かね」

闇が落ちる道を、フェルは迷いなく進む。人影はあまりない。

「暗いから、夜になると皆家にこもる。この道も、前は夜でも賑やかだったんだが、人が出ないから店が閉まり、余計に人がいなくなつた」

人がいなくなれば商業はままならなくなり、経済は滞る。

「魔法があまり浸透していない国は、ここまで影響を受けてない。異変の前は魔法技術が高いことが国の強さに結びついたが、今は逆だ。魔法大国と冠しながら異変を解決できない国に、国民も不信感を抱いてる。それが国の弱体化に結びつく」

異変の影響を受けない国が、経済面でも政治面でも影響が少ない。リーズヴェントが魔法大国と呼ばれるほどの国ならば、その影響はいかばかりか。

「こつちだ」

フェルが道を曲がる。細い道だ。街頭もなく、異変の前でもそう明るくはなかつただろう道。人通りもないようで、人影も見えない。

「この道は商業通り一つに挟まれた細道で、街頭も少なく異変前から暗かつた。街頭を増やす計画もあつたんだが、異変のせいで話もなくなつた」

「確かに暗いわね」

「ああ。だから人が通ることはない」

フェルが立ち止まる。

「ノエル」

ノエルの名を呼んで振り向くと同時に剣を抜く。その切つ先をノエルに向けた。

「頼みがある」

暗くてフェルの表情は見えない。だがその銀に輝く刀身は、紛れもなくノエルの首元を指していた。

ミカが剣の柄に手をかける。

「動くな」

だがフェルの低い言葉とノエルに向けた刀身の動きで、ミカは手をかけたまま動きを止めた。

フェルが少し手を動かしただけで、ノエルの首は胴体から切り離されるだろう。

これまでの長くはない人生で、命の危機を感じたことが何度かある。ノエルは生きたかったから、そのときは身体が震えた。死にたくない、と頭が焼き切れるくらい強く思った。けれど今、身体が震えないので、フェルから殺氣が感じられないせいなのか。

「人にものを頼む態度じやないわね」

ノエルの聲音は冷静だ。

「こっちも切羽詰まつててね。だがその通りだな。剣は下げられな
いが、本名は名乗つておこう」

「本名?」

そう、とフェルは頷いた。

「フェルディナン・フェラン・ヴィ・レークエイナ。レークエイナ侯爵家の騎士であり、王太子エドヴァルト殿下の近衛騎士だ」

ノエルはどこか納得していた。

フェルの博識さは、世界情勢はともかく王宮内部の対立図や王子の政策については、王家の近くにいなければ知り得ぬものだった。元の世界で王侯貴族の一部とも交流のあつたノエルは、彼らのまとう隠しきれない気品さを、感じていたのかもしれない。フェル否、フェルディナンに。

「王太子の近衛騎士がなんでこんなところにいるわけ？」

フェルディナンは肩をすくめた。意外、という顔だ。

「驚かないんだな。ミカは驚いてるみたいだが」

横目にミカを見れば、啞然とした表情でフェルディナンを見ている。相変わらずポーカーフェイルの苦手な男だ。

「少し前に盛大に驚いたから、少しのことじや驚かないの」

自身の正体を“少しのこと”と評されたフェルディナンは、不満げだ。驚いてほしかったのかもしれない。

「で、王太子の近衛騎士なんでしょう？」

「ああ。ここにいるのはその王太子の命だ。騎士団の報告じや納得できないから、特に辺境の街の様子を探つてこいつてな。あと異変を解決できそうな要素を、俺なりに探れと」

フェルディナンはノエルにほほえみかける。

「俺は魔法使いじゃない。研究者でもない。だが、魔法が発動されたかそうじやないかくらいは分かる。今日のティガ掃討で、子供を助けるために魔法を使つただろ？」

ノエルは答えない。

見られていたのか、と内心舌打ちをする。あの騒動だ。しかも風であればそう目立たないだろうと踏んでのことだったが、まさかよりにもよつてフェルディナンに田撃されていたとは。

「最初から不思議な子だとは思つてた。だから仕事を同じにして動

向をうかがつてもみた。ナイフ捌きを見てもつと確信した。その細い身体じゃ、ああもうまくナイフは捌けない。あれも魔法なんだろ？」

確信めいたフェルディナンの言葉。

「仮に魔法だつたとして。頼みつてなんなの？」

「わかつてるだろ？ 魔法が使えない今の世界で、君だけが使える。それは異変の解決の糸口になると思わないか。だからこそ、ノエルも魔法使いに接触したがつてたんだろ？」

「異変解決に手を貸せ、と？」

フェルディナンは頷いた。

頼みとやらの内容は予想通りだ。

ノエルは唇に指をあてる。

フェルディナンの頼みを受け入れれば、魔法使いとの接触は容易だろう。レークエイナ侯爵家がどのような家格なのかは分からないが、王太子の近衛騎士になるくらいだ。王国から信頼されるだけの歴史と地位が持ち合わせているはずだ。となればフェルディナンの手引きで魔法使いのと接触し、この世界の魔法を知ることはできる。利害は一致する。だが。

「断ると言つたら？」

フェルディナンは肩をすくめる。

「無理にでも連れて行くまでだ」

ミカの目が強くフェルディナンを射貫く。ノエルのしきりに視線を送るのは、自分ならばこの場を切り抜けられるであろうに、切つ先をのど元につきつけられているのに、なにを悠長にしているのかという思いからである。

「アンタの言つように私が魔法を使えるなら、逃げる」とも容易かもしれないわよ」

「逃げれば指名手配する。行動は制限されるだらうな

「スマートじゃないわね。女にもてないわよ？」

スマートじゃないな。女にもてないぜ？」

意地の悪い大人の煽り文句を、自分が口にするとは思わなかつた。フェルディナンは、そうだな、と苦笑する。

「だが仕方ない。言つたろ？ 切羽詰まつてゐるつて。リーズヴェントは魔法によつて成長してきた国だ。だから他国よりもこの異変で受けた影響は計り知れない。経済の停滞、商業の崩壊、人々の心には疑心暗鬼が生まれ、騎士団や國への反発が強まる。税収入は異変後下降の一途。強い徵収をする領主が、領民によつて倒されるという事例もあつた。今度は王家がそうなると、否定できたもんじやないだろ？ なによりニールの問題がある。ニールだつて異変の影響は受けてるが、リーズヴェントほどじやない。異変後の外交は、そりや難しつつ外交官が嘆いてる」

だから、とフェルディナンはノエルを見る。

「君を王都に、王太子の前に連れて行く」

表情は暗くてうかがえないが、声音は強い。

フェルディナンの言葉は、すべて真実なのだらう。フェルディナンは国を思つてゐるのだろう。

だが。

「私を取り込んで、自国の立場を強めようといつの？」

王国の貴族たる人間についていけば、それは、その国に_{シテ}したも同じだ。

「ニールとの外交を有利に運ぶため。世界における自国の立場を強固なものにするため。仮にニールとの間で戦争が起これば、私を兵器として使うため？」

フェルディナンが息を飲む。

ノエルは瞳を閉じて、頭の中で魔法を構築する。

唇に当たた指先をそつと下ろし、のど元に突きつけられた切つ先に添える。

(雷撃)

ノエルの指先から具現した雷撃が、フェルディナンの剣をはじく。雷撃の光に、フェルディナンの驚愕した表情が見える。

ノエルが突きつけられた剣から解放されるのを見るやいなや、ミ力が剣を抜く。それを横目に、ノエルはさらに続ける。

「仮に異変を解決する術を見つけたとして、それをリーズヴェント国内だけに留まらせれば、あるいはこの世界を掌握することもできるかもしないわね」

頭の中で構築した刃を具現させる。

それは正確に、フェルディナンの首に切つ先を向けた。

立場は逆転した。具現した刃が光を放つ。それに照らされ、フェルディナンの表情が強ばる。だがレークエイナの騎士は気丈にも言い返す。

「そんなことはさせない」

「アンタがそう思つても、王太子はそうじやないかもしない。王太子がアンタと同じ意志でも、他の貴族連中はそうじやないかもしない。王国の意志は一つじやない。そうでしょう？」

ノエルの故国リューングスとてそうだ。意志は人それぞれにある。ノエルの存在によつてこの世界の国々の立場が歪められてしまつのは、ノエルの望むところではない。だから目立たないようにしてきたといつのに、油断がこの結果を招いてしまつた。

「王太子 エドヴァルトは違つ。それだけは言える。だが他の貴族はそうじやないだろつ。ノエルが魔法を使うのを見れば、ノエルが言つたようなことを思つだろう」

フェルディナンと王太子は、主従でありながら友情を結んでいるようだ。

「だが、させない」

真摯な目。

「俺が、レークエイナの名と、エドに捧げたこの剣にかけてノエルは構えていた剣をいつの間にか下ろしているミカを見た。

「どうする？」

「どうするつて……」

「行つてみる？ 王太子のところ

ミ力からは先ほど感じた殺気が消えている。

ミ力は困ったようにノエルとフェルディナンを見る。

「俺は部外者だしな。 魔法使えないし」

「なに言つてるのよ」

ミ力の足を蹴る。

「私についてくるつて言つた以上、関係はあるの。 大ありなの。 その上で、アンタの意見を聞いてるの」

うーん、とミ力は唸る。

「ノエルがしたいようにすればいいんじゃないか? フェル いや、フェルディナンだけ? 」 いつもについていけば魔法使いとの接触は簡単だし。 もしこいつや王太子や貴族がノエルを利用しようとしたら、逃げればいいし」

「簡単に言つわね。 王宮よ?」

ミ力は笑う。

「ノエルなら簡単だろ。 俺も協力する」

「……あ、そ」

意外なほど簡単に、その言葉は信用できた。

ノエルは具現させた剣を消す。

「いいわ。 アンタについていく。 異変の解決に協力してもいい。 だけ条件がある。 まずは私を魔法使いと接触させること、政争に巻き込まないこと、戦争に巻き込まないこと、もし異変を解決できたら、それをリーズヴェント以外にも広く公表すること。 そして、アンタが誓つたことを、王太子にも誓わせること」

「いいだろ?」

即答だった。

「アンタが家名と剣に誓つたことを破つたら、城を破壊してでも逃げさせてもらうわ」

「……そうならないよう元に善処するよ」

第九話 王都へ

王都はエラムから街道を西に行き、山を越えた大陸中央部にある。馬車で十日。

「休憩を挟めばプラス一日といったところか」

御者台で眩いたフェルディナンは、馬に鞭を当てた。

「悪いな、ノエル。次のでかい街についたらもう少しいい馬車に変えるから今は我慢してくれ」

フェルディナンが用意した馬車は、簡素な造りの小型の幌馬車だ。フェルディナンは幌の中のノエルを振り返る。なるべく居心地がいいようにと与えられたクッションや毛布に座るノエルは、首を振る。「この馬車でもいいくらいよ。そこまで柔じやないわ

飲み物もあり、食べ物もある。居心地も悪くない。破格の扱いだ。

否、異変を解決させる糸口ともなる存在なのだから、当然なのか。

「それより意外ね、侯爵家の人間が馬車を操るなんて」

「魔法大国において、俺には魔法の素養はない。だから剣と馬と」と、いろいろ鍛えた

引っかかる言葉だ。

「この国では、魔法の素養は誰もが持つものなの？」

「ノエルとミカはこの國の人間じゃないのか？北の出だと思つた。ミカはちょっと別の血が混じつてるかもしれないと思つてたが」「北の出よ。だけど世間のことはあまり知らないわ」

北の出であることは確かだ。リュングスは北の国だから。

ミカはどうであろう。ノエルは傍らのミカを見上げる。人種的に見れば、ノエルとそう変わらないように思える。異界の人間だが、血のルーツは似たような環境なのかもしない。

「俺も北の出。フェルディナンの言うとおり、別の血も混じつてるけど」

「ああやつぱりそつか。リーズヴェントじゃ珍しいな。どこの国だ

？」

「父が東の國の人間なんだ。俺は行つたことないから、よく知らないんだけどさ」

北と東。ミ力と元の世界での話だらうか。

親。ノエルの両親は死んでいるが、ミ力はどうなのだろう。傭兵をしていたといつ。それを踏まえれば、死んだか離散したか捨てられたか……。

「東か。俺も行つたことがあるのはニルとか中央大陸の北側の国ばっかりだな。リーズヴェントは鎖国的だからな」四方を海に囲まれていればそうもなるだろう。

「そうそう、素養の話だつたな。さすがに誰もがつてわけじゃない。だけど魔法大国だから、貴族は素養を求めて昔から強い力を持つ魔法使いを嫁に迎えたり養子にしたりしてたから、結果として王侯貴族はほとんどが魔法の素養を持つようになった。もちろん王太子も魔法使いとしての実力もある。正確には“あつた”か。異変後には使えなくなつた」

「肩身の狭い思いをしたのか？」

ミ力の言葉は気遣わしげだ。

フェルディナンは笑う。

「ないとは言えないな。嫡男だつたらもっとひどかつただろう。その点では兄貴に感謝だな。三男坊だから好きに動ける」

フェルディナンはリーズヴェントの重鎮レークエイナ侯爵家の三男であるらしい。長兄が家を継ぎ、次兄が遠方の領土を継ぐ。長兄も次兄も不足ない侯爵家人間であつたし、魔法の素質も持つていた。

三男であるフェルディナンは何も継ぐものはなかつた。長男以外の男子は継ぐ領土がない場合、多くは騎士になるか領土を持つ女性を妻に迎える。

フェルディナンには魔法の素質はなかつたが、後者を希望する女性やその父親も多かつた。しかしフェルディナンは前者を選択し、

王太子の近衛騎士となつた。

「子供だつた頃、魔法の素養を諦められなかつた親父が俺を王宮の魔法学講師のもとに送り込んだ。権力でな」

馬を走らせながら、フェルディナンは語る。

「王宮の魔法学講師に教わる生徒は、誰もが素養に優れ、将来を嘱望された“選ばれた生徒”ばかりだ。そんな中で、素養を持たない俺がやつていけるわけがない。ノエルだつたら混じれたんだろうが」

フェルディナンの世辞にノエルは肩をすくめた。

「散々だつたが、友人はできた。今、宫廷魔法使いとしてつとめている。優れた魔法使いだ。ノエルなら話が合つだらう。ちょっと変人だけどな」

フェルディナンはクスリと笑う。

「魔法使いつてのは優れた奴ほど変人が多い。ああ、ノエルがそうだつてんじやないぞ」

「別にいいわよ」

ノエルは、無言で肩を震わせているミ力を密かに蹴つた。

「王太子と俺の友人である宫廷魔法使い以外には、ノエルの存在は魔法を使えるということは、隠しておこうと思つ」

「王太子とアンタの友人とやらは信用できるわけ？」

フェルディナンは振り返り、にやりと口角をあげて笑つた。

「あいつらに裏切られたら、俺は国を出るしかない」

「そう、わかつたわ」

ノエルはそつと笑つてうなずいた。

その日は一日獣などの襲来もなく、穏やかな旅だつた。あたりが闇を濃くしはじめ、馬車で進めなくなつた頃、フェルディナンが野宿にいい場所を探すと言つて馬車を降りた。

しばらくして戻ってきたフェルディナンは、見つけた場所に馬車を移動させ、手慣れた手つきで火をおこした。

「アンタほんとに貴族？」

あまりに鮮やかな手つきに、隣で見ていたノエルがあきれた声を

出す。

「貴族の生まれだが、騎士には実地訓練でのものがあつてな」

貴族に多いお飾りの騎士は拒否する実地訓練では、遠征に備えて野宿での火興しや飯の準備、敵意を持つ者から見つかりにくい場所など、さまざまな実地的な訓練を行う。実際に他国の侵略や遠方での反乱などが起こった際は、こういった訓練なくしては立ちゆかないだろう。

「悪いな、ノエル。明日には次の街に着くが、王都に着くまでにはあと二三回野宿しないといけない」

「別にかまわないわ。そんなに纖細じゃないし」

ミカが沸いた湯で茶を淹れる。ミカの手つきもフェルディナン同様に慣れた者なのだ。

「はい、ノエルの分」

「……ありがと」

ありがたく頂戴し、カップを両手で包み込むように持つ。まだ熱い茶にふうふうと息を吹きかけた。

ミカとフェルディナンが飯の支度をしている間、ノエルは木に寄りかかって夜空を見上げた。

作業を手伝おうとしたのだが、手つきの危つさに一人から止めが入ってしまった。そういうば前に少し旅をしたときも、飯の支度をするのはトリシャや大人達だった。ノエルとラインハルトは野菜を洗ったり薪を取りに行つたりと、実際の料理には携わらせてもらえなかつた。きっとラインハルトの不器用さが移つてしまつたのだと、ノエルは自身の不器用さを幼なじみに軽嫁した。

「できたぞー」

火のそばにいるミカが、ノエルを手招く。

ノエルがそばにくると、ミカは自信作だと笑つて料理の器をノエルに渡した。

「俺とフェルディナンの大合作な。心して食えよ」

「……いただきます」

晩ご飯はおいしかった。

片付けを終わらせた後、明日に備えて早々に眠ることになった。

フェルディナンは剣を傍らに置いて木に寄りかかる。

「ミカ、夜中になつたら見張り交代な」

「ああ、わかつた。起こしてくれ」

ミカが気安く請け負つて寝床に入る。早くも目をつむつて、完全に眠る体制だ。

「ねえ、私は？」

ミカの隣で半分寝床に入つた状態のノエルが問う。

しかし返ってきたのは、男二人の不思議そうな視線だ。

「ノエルは寝ていいよ。俺とフェルディナンで交代するし

「それじゃあ、ずるいでしょ。私も見張りをするから、きちんと三分割しなさいよ」

でも、とミカは渋い顔だ。

「ノエルは、たとえば野党が出ても倒せるのか？」

フェルディナンの問い。

勿論だ。ノエルは頷いた。

「夜盗くらい私の魔法で」

「魔法は禁止。騒ぎになつたらまずいだろ」

「私が目立つ魔法使うと思つ? 夜だし、風の魔法なら気づかない。それでも使うなつてんなら、身体能力を向上させる魔法組み込むから」

胸の前で手を交差させ、知ある文字を唱えようとしたノエルの手を、ミカが上からかぶせるように手を置いて制す。

「ノエルはずつと馬車に揺られて疲れただろ。今日は寝ていい。次の野宿から頼む」

「馬車に揺れてたのは全員じゃない」

一番疲れが大きいのは、馬を操っていたフェルディナンのはずだ。「フェルディナンは慣れてる。俺は体力がある。ノエルは両方ない。だから、今日は寝ろつて。な

そう言つて、ミカはノエルの頭に手を当てて倒してしまう。寝床とぶつかるときには反対側の手を緩衝にするという気の使いようだ。そうしてノエルの頭は強制的に寝床の上だ。

「適材適所つて言葉があつてさ。ノエルは頭を使う。俺は体を使う。だから今日はノエルは寝る。いいか？ 1、2の3で寝るんだぞ」まるで子供に言い聞かせるような優しさに満ちた声でミカが言う。ノエルは虫を噛みつぶしたような顔でミカを見上げるが、諦めてその声に従うこととした。

「さすがに1、2の3じゃ眠れないわよ」

野宿は正直言つて好きじゃない。好きという人間はそういうだらう。

ノエルは野宿ではそうたやすく眠れないし、不安に思つたりする。けれどそつと頭に触れて離れていくその手が、その不安を取り除いてくれた気がした。

「おやすみ、ノエル」

「本当に恋人同士じゃないのか？」

交代の時間になった。

夜の闇はもつとも深い時を迎え、火の音と鳥と獣の声、そして木々がこすれあう音しか聞こえない。

フェルディナンはミカを起こした。声をかけるとミカはすぐに起き上がり、隣でぐっすり眠っているノエルを見て、安堵したように

ほほえんだ。

その様子を見て、フェルディナンは疑問に思つていたことを口にした。

「違うつて前も言つただろ？」

フェルディナンが礼と称して食事に誘つたときのことだ。ノエルは今ミカが答えたように否定の意を示した。

「いい雰囲気じゃないか」

「俺はノエルに助けられたんだ。だから優しくしてんの。それに可愛いしな。フェルディナンに助けられても、ノエルにするようにはできないかなー」

ミカの冗談に、フェルディナンはされても気持ちが悪いだけだと笑つた。

「子供だろう」

16と言つたが、小柄で華奢な体格は、ノエルをそれ以下にも見えさせる。外見の幼さに反して、頭の回転はフェルディナンでも舌を巻くほどだ。そのギャップに魅力を感じる輩も、いないではないだろつ。

「口説いてたじやないか」

「口説かれてくれば楽だと思つたんだがなあ」

フェルディナンは宫廷の淑女達のなかで名をはせてきた方だ。外見と王太子の近衛騎士という地位に惹かれる女性は多い。だがノエルには効力のないものだ。魔法が使える少女を籠絡することができれば、やりやすくなると思ったのだが、籠絡できる気がしない。

「その手はノエルにはきかないと思つぞ。そういうの抜きで頼んだ方がいけるつて」

「貴族社会に生きてきた者にとつて、それこそ難しいもんがあつてね。俺はいいんだけど、エルがなあ」

王太子エドヴァルト。庶子でありながら立太子された王子。その立場ゆえに強い意志を持ち、尊大であり続けなければならなかつた王子。

国での、世界のためとはいえ貴族ですらないノエルに真摯に頼み、またフェルディナンが行つたような誓いをなせるかどうか。

「そのあたりは俺はしらねーけど。王太子のことはフェルディナンに任すよ。俺はいざとなつたらノエル連れて逃げるから

「逃がすかつつの」

ミカの肩を軽く殴り、フェルディナンは毛布を引き寄せて横になつた。

次の街で、馬車を乗り換えた。

フェルディナンが街の領事に身分を名乗ると、立派な馬車が与えられた。護衛の騎士を伴うことには、フェルディナンが適当な理由をつけて断つた。

休憩のために何度も道中の街々に寄りながら、王都への旅は順調に続いた。

王都へ近づくごとに街道を幅広く立派になり、道行く人々や馬車の数も増えた。

そしてエラム出立から十一日後の朝。

「見えてきた」

フェルディナンはノエルとミカを振り返り、前方を指さした。
朝靄のなか、断崖の山肌につくられた王宮。周辺は山と森。

「あれがリーズヴェント王都、そして王の城、白亜宮」

白亜の名の通り、王の城は白い。

王都は街 자체が城壁をなすつくりで、王都が美しいだけではなく戦いのためにつくられたことを物語っていた。

「戦争向きの街ね」

鎖国状態だったわりには。

「王都は初めて見るか？白亜宮は三国時代の名残でああなんだよ」リーズヴェントの歴史までは知らない。かつて大陸には三国が存在したのだろうか。他大陸からの侵攻はなくとも、この大陸内で三国間の激しい戦争があつたということか。

ノエルはフェルディナンの隣に座る。

「きれいな街ね」

「だろう？」

フェルディナンは自慢げだ。

「おーきれいなもんだな」

ミカも顔を出す。

フェルディナンの地元自慢がはじまる。
城門が見える。白き王都は、目前に迫っていた。

第十話 魔法使いたち

馬車はまっすぐに白亜宮に行くことはなく、一の郭にあるフェルディナンの家 レークエイナの屋敷へ向かつた。

王都は城壁を基準に、一の郭、二の郭、三の郭、四の郭にわけられている。数字が大きくなるにつれて外側になる。一の郭は白亜宮を内包する一等貴族の区画。二の郭は中級以下の貴族の区画。三の郭はおもに騎士宿舎がある。四の郭は庶民の街で、四の郭の外は所謂下町だ。

城門から一の郭の城壁までまっすぐに大通りが通つていて、一の郭から遠ざかるごとに、大通りから遠ざかるごとに治安は悪くなるが、全体的な治安としては悪くない。大通りとそれに準ずる通りは、夜でも女性の通れる治安の良さだ。かつては。

「今じゃ大通りでさえ夜の散歩は無理だ。特に女性はな。さすがに三の郭までは治安が保たれているが、四の郭となるとな」

屋敷に着いたフェルディナンは、侍従に食事と風呂の準備を申し込みつけた。

「早めに王宮に行こう。親父と兄貴に見つかると面倒だからな。申し訳ないが風呂は早めにあがってくれ」

そう言われて、ノエルは風呂に放り込まれた。

さすがに一等貴族の屋敷ということもあり、屋敷は広く豪奢だ。浴室もまた、それに相応しい広さと豪華さを持つており、置かれている石けんなどは街の宿屋と雲泥の差のある品質なのだろう。

途中休憩を挟んだとはいっても十日以上馬車の旅をしていたのだ。身体に疲れがたまつていて、浴槽のなかに埋まりたくなるが、早めにと言われているのでそもそもできない。名残惜しいが手早く身体を洗つて風呂を出た。

風呂を上ると、着替えが用意されていた。ノエルが着ていたものではない。広げてみると、薄い紅色のワンピースだった。

「私の服は？」

ノエルは独りごちた。

今までノエルは、元々着ていた大学支給の研究者の制服か、動きやすい旅装を好んで着ていた。

しかしこの服は、街中で年頃の女性がよく着ているようなもので、旅に向いていとは言い難い。王都に着いた以上、しばらくはここに留まる予定だからこれでも構わないが、下着まで新しいものが用意されていることにはいい気がしなかつた。さすがにフェルディナンが用意したものではないだろうが別問題だ。

他に衣類もないでの、憮然としながら下着を着け、ワンピースを着た。

ノエルが旅装を購入した、古着屋にあつた同型の衣類よりも質がいいように感じた。裕福な庶民家の娘が着るようなそれだ。

着替えてしばらくして、扉がノックされた。メイドらしき女性が顔を出す。

化粧をしてくれようとしたが、ノエルは断つた。外見を飾ることに興味のないノエルは、故国でもこの国でも化粧をしたことがない。困ったような顔をしたメイドが、せめてこれだけでも、と紅をしてくれた。人の好さそうなメイドを困らせるのもどうかと思い、ノエルが折れた。

「フェルディナン様がお待ちですよ」

フェルディナンは自室にいた。文句はたくさんある。

「なかなか似合うじゃないか」

フェルディナンも立派な騎士の格好に着替えている。胸に描かれた王冠と剣は、この国の紋章だろうか。

「元の服はどう?」

「洗濯中。ノエルが魔法使いつてのは伏せておきたいから、今日だけ我慢してくれ」

「どういう設定なの?」

ミカが来てから話す、とフェルディナンは答えた。

「女より遅いってどうなのよ

姿を見せない男に毒づく。

「ノエルが早いんだ。化粧は……紅だけか。でも肌にはりもあるし、しないほうがいいんじゃないか? 可愛いよ

「そりやどうも」

褒め言葉に気のない返事で応じ、ノエルは椅子に座り込んだ。かかとのある靴は慣れない。

「かかとない方がよかつたか? 靴擦れは?」

「まだ傷にはなってないけど、長く歩くとしそうだわ」

「別の靴持つてくるか?」

「別にいい。慣れてない靴なら全部同じだわ」

フェルディナンがノエルの足下に跪く。

「テープ貼つておこう。痛くなったら言つてくれ」

靴をとり、ノエルの足の少し赤くなっている部分にテープを貼る。

「騎士と姫様、こっか? 僕の役は?」

言いながら現れたのはミカだ。フェルディナンと似たような格好に着替えている。騎士の服だ。

「靴擦れ防止にテープ貼つてもらつただけよ」

「靴擦れ? 大丈夫か?」

「多分ね」

両方の足に貼つてもらい、靴を元通りに履くと僅かに疼痛を訴えていた部分も静まった。

「どつかのお嬢様みたいだな、ノエル」

「言い過ぎよ」

「そんなことない。可愛いよ」

その言葉 자체、子供に与える褒め言葉そのものだが、ノエルは笑つてありがとうと言つた。

「フェルディナン。それで私とミカはどういう設定になるわけ?」

「ノエルとミカは俺の友人の遠縁。ノエルは行儀見習い、ミカは騎士見習いってことで王宮に出入りしてるので設定だ」

「友人つて？」

「呼んだからすぐ来る。ノエルが会いたがってる魔法使いだよ」

折良く、侍従が来訪者を告げた。

「来たようだな。案内してくれ」

侍従が下がり、しばらくしてフェルディナンの自室に一人の男女が姿を見せた。両者とも、灰色のローブをまとうている。

「久しぶりだな、ハインツ、ウルリカ」

フェルディナンが立ち上がりて来訪者と握手を交わす。

「急いでこいと言われたから急いできたけど、急すぎだよ、フェル」

「悪いな。でも、お前にとつてもいい話だ、ハインツ」

「おかげで髪を整える暇もなかつたわ」

「お前の髪はいつもそんなだら、ウルリカ」

ハインツは眼鏡をかけたやせぎすの男。ウルリカはボリュームのある巻き毛の黒髪が印象的な女だ。

「そちらのご令嬢と騎士殿は？」

ハインツが聞く。

「ノエルよ」

「俺はミカ。よろしくー」

ノエルとミカも立ち上がる。

「僕はハインツ・イステイ。宫廷魔法使いだ。フェルとは魔法学の先生のもとで一緒にいた」

「最初だけな。俺はすぐに辞めたから」

「私はウルリカ・シュヴェリーン。ハインツと同じく宫廷魔法使いで、フェルの元同窓よ」

宫廷魔法使いは魔法使いのなかでも特に優れた者にしか与えられない地位だ。国王 現在はその代行である王太子 の決定でのみ与えることが決まる。年若くして宫廷魔法使いの地位にあるハインツとウルリカは相當に優れているということだ。

年はフェルディナンと同じくらいだろうか。ノエルより数年上であることは確実だ。

自己紹介が終わつたところで、フェルディナンが口火を切つた。
「まず、ハインツ、ウルリカ。今から話すことは極秘だからそのつもりで。ここにいる奴らのほかは、エドにしか話さない」

「殿下だけ？ どういう話なの？」

ウルリカが言う。

「お前らに大いに関わることだよ。異変についてだ」

「そういうえば、フェルは独自に異変調査をしてたんだって？」

ハインツが言う。

「ああ。異変調査というより、異変後の街々の様子を探つてたつてのが本当のところだがな。でもその途中で、彼女を見つけた」

フェルはノエルを見る。それにつられるように、ハインツとウルリカの視線もノエルに移る。

「実際に見た方が早いだろ。ノエル、なんか小さいの頼む。屋敷壊すなよ」

「壊さないわよ」

ハインツとウルリカの視線を受けながら、ノエルは手のひらを田の前にかざす。

構築、展開。

ノエルの手のひらに、光が生まれる。ハインツとウルリカが息を飲む。ノエルが唱える魔法を表す文字によつてそれは形を変え、陣を形作る。

(具現しなさい)

構築し、展開し、具現する。魔法によつて多少方法は異なるが、ノエルにとつては当たり前の魔法構築。

魔方陣はノエルの手のひらから離れ、ひらひらと足下に落ちる。地面に落ちると同時に、魔方陣は光をまして広がる。そして瞬きの後、そこにノエルの姿はなかつた。

フェルディナンが息を飲んで立ち上がる。

「ここよ、ここ」

その背後で、ノエルは壁を背に寄りかかつて手をひらひらさせて

いた。

「このくらいの距離の転移なら、準備なしでできるわ。実利ないけどね」

「お、驚かせるな。てっきり風とか火とか見せるのかと」

フェルディナンは安堵して座り込む。

「転移の方がわかりやすいかなあと思って」

ノエルは歩きながら言い、元の席に座った。

言葉もなく唖然としているハインツとウルリカに視線を向ける。先に意識を取り戻したのはウルリカの方だった。

「い、い、今の魔法？！ど、どうやって……！」

「ウルリカ、人払いしてるが、一応声量落とせ」

フェルディナンが注意する。

興奮状態のウルリカは、それにも構つていられない様子だ。

「……だめだわ！私は使えないわよ！」

目を閉じて何をしていたのかと思えば、魔法を使おうとしていたようだ。しかし使えないと、そう言って嘆き散らす。それを制するように、その腕に手を添えたのは、ハインツだ。まだ驚愕から立ち直つていないので、顔を片方の手で覆っている。

「これが、彼女をここに連れてきた理由かい？フェル」「そうだ、とフェルディナンは頷く。

「なら早速彼女の魔法を調査しなければ。長官に言つて宫廷魔法使いを全員集めましょう。第一研究室をおさえないと。ああ、殿下にもお話をしないと……」

ウルリカがハイソの手を払い、興奮した様子で言いながら動き回る。

フェルディナンは嘆息する。

「ウルリカ。先にも言つたが、これは極秘だ。エル以外に言つことには許さない」

ウルリカはフェルディナンをねめつける。

「どうして？彼女の存在は異変後最大の発見よ。全員で調査して、

早く異変を解決しなければ」

「富廷魔法使いのなかには、宰相と繫がつてゐる奴も多いだろう。だからだめだ」

「どうして！」

「宰相は今は異変の解決を第一に掲げてゐるが、前はそうじやなかつただろ。ニールとの開戦派だろう！ そんな奴がノエルの存在を知れば……」

「彼女を兵器として使いかねない……か？」

ハインツがフェルディナンの言葉を引き取つた。

フェルディナンは頷く。

「それだけじゃない。もし仮に異変の解決が世界同時になされるものでなければ、リーズヴェントでの独占、悪くすれば王宮のみの独占。あるいはかつての魔法を捨て、ノエルの術をこれから魔法とするかもしれない。その技術の独占。そうすればリーズヴェントのみが成長し、他国は遅れをとる」

「あるいは世界を統一することも可能つて？ ま、考えられない話いやないねえ。大陸外の領土を自國のものにして、利益があるのかどうか僕にはわからんけど」

ハインツは肩をすくめる。

統治の仕方次第だが、難しいだろう。元が他国だったのなら余計に、反乱分子を内にくわえ込むことになる。

「そんなん……」

ウルリカが悄然とした様子で言葉をなくす。

「事実だ。知つてゐるだろ、ウルリカ」

「ええ、そうね。わかつたわ」

「戦争は嫌いだらう？ 僕だつてそうだし、ノエルだつてそうなんだ」

「ノエルは頷いた。戦争は嫌いだ。まして、自分がその原因となるなどもつてのほか。」

「それに、あまり話をでかくするとどうしても他国に漏れる。そう

すれば、ノエルの誘拐って話もなくないからな

「なくないというか、十分有り得る話だよ、それ」

中央大陸の国々とか、とハインツが国の名前を連ねる。ノエルは知らないが、それは誘拐という強引な手もしかねない国なのだろう。「だから極秘だ。調査はハインツとウルリカでやってくれ。あと、ノエルとミカを王宮に入れりさせる口実なんだが」

「口実は必要だよね」

ハインツも頷く。

「お前の遠縁つてことにするから」

「僕？」

「俺やウルリカだと家が面倒だから。その点、お前は大丈夫だろ?」「両親は死んでるし親戚も縁遠いしねえ」

妥当な手じやない、と他人事のようにハインツは言つ。

ウルリカはフェルディナンと同じく貴族の出だが、ハインツはそうではない。庶民の出であり、両親とは死別している。世話になつた叔父も死に、近しい縁者は誰も残つていらない。ノエルと似た境遇だ。

「ノエルとミカは、この異変で職を失い遠縁のハインツを頼つて王都に来た。で、ハインツは友人である俺を頼つてノエルとミカに職を斡旋。ノエルはハインツの雑用をこなしながら行儀見習い、ミカは騎士見習い。これならノエルが研究棟に入りしても不思議はないし、完璧だろ?」

フェルディナンは自身の完璧なる口実に胸を張る。

「妥当なところね。最近は殿下も研究棟に入りしているし、殿下に会わせるのも楽だわ」

「よし、まとまつたところで研究棟に移動だ。エルは俺が理由付けて研究棟に行かせるから

善は急げとばかりにレークエイナの屋敷を出、フェルディナンは王太子のもとへ、ノエルとミカはハインツとウルリカに連れられて魔法棟へ向かつた。

第十一話 王太子

ノエルの故国リュングスにも国王がいる。北の魔女の一件で、ノエルは国王とも親交がある。ノエルの知る王族とは故国の国王と、今は亡き彼の父親を指す。国王のその父親も、豪放磊落な性格だ。特に息子の方は堅苦しいことが苦手で、よく執務から逃げ出しては側近に怒られていた。けれど憎めない、そんな王だ。

だからだろうか。ノエルは王太子と聞いて鷹揚な人物を思い描いていた。

けれど違つた。

王太子エドヴァルトの第一印象は、氷のよつた冷たさ。小柄なノエルを見下ろすその青い瞳は、冷徹な光を湛えていた。

「お前が、ノエルか？」

年は若い。フェルディナンとそう変わらない。髪は亜麻色で、少し長い。

「そうです、殿下」

フェルディナンに世話になつてゐる手前、一応礼は尽くそうとノエルは思う。なにせ相手はこの國の王太子だ。故國の王に対してもあまり礼を尽くした態度とはいえないノエルだが、それは相手が堅苦しい態度を嫌うからに過ぎないし、一応節度は保つてゐる。

研究棟の一室、ハインツに与えられた研究室のなかだつた。書類や書籍、わけのわからない紙類が散乱し、決して狭い部屋ではないのに足の踏み場はごく僅かだ。そのごく僅かな踏み場も、先ほどノエルとミカが入つたときにハインツが適当に退けたことによつて作られたものだ。

当の部屋の主は、壁際に立つてエドヴァルトの様子を見ている。「殿下。女性に名を聞くのに、自分の名を名乗らないのはどうかと思ひますよ」

やせぎすで頼りなさそつな外見に反して、ハインツは王太子相手にもはつきりとした物言いをする。

エドヴァルトは鼻を鳴らす。

「エドヴァルト・エリト・エイム・コングリングだ。フェルから聞いているだろう」

「聞いているからといって省略してもいいということにはなりませんよ。フェルは？」

王太子をここまで連れてくる役割のフェルティナンは、姿が見えない。

エドヴァルトは手近な椅子を引き寄せて座った。

「レークエイナ候に捕まつた。見知らぬ女を屋敷に引き入れたことがばれたらしくてな」

「それ、私だわ」

ノエルが呟く。

数少ない富廷魔法使いのウルリカのことはレークエイナ候も知っているであろうし、見知らぬ女ということであればノエルしか考えられない。

「だろうな」

「大丈夫かしら……」

「あいつが屋敷に女を連れ込むのは珍しいことじやない。おおかた、レークエイナ候に説教されているだけだろう。早くレークエイナに適當な貴族の娘を娶れと」

エドヴァルトの言うことが正しければ、ノエルはフェルティナンが引っかけた女に見られたということか。あまりいい気持ちはしない。

ノエルが渋面を作つていると、エドヴァルトがところど、と口火を切つた。

「本題に入るが、魔法のことだ」

「はい」

「早速だが実演してくれ。この目で見なければ信じがたい」

睨むような目つき。

内心撫然としながら、表には出れない。
手のひらを正面にかざす。

(構築、展開、具現)

手のひらに生み出された螢火のような光は、ふわふわと中空を漂い、エドヴァルトの目の前でぱちりと消えた。軌道を日で追つていったエドヴァルトの表情が驚きに変わる。

「これは……」

「明かりを灯す魔法です」

ノエルの世界では、文字や知識を詰め込むだけで素養のない人間にも使うことのできる、「よく簡単な魔法だ」。

「……我が国の魔法の学徒が、一番最初に教わる魔法だ」

エドヴァルトが呟く。螢火が消えたその場所を、恋人でも見送るように見つめて。

「簡単な魔法ですからね」

「だが、今はそれさえ使えない」

エドヴァルトがノエルを見る。

「なぜお前だけが使える？」

「それをこれから調べようといつところです。まずは魔法の体系と、あと私自身がこの国的一般的な魔法の理論を学ぶことで、
しかし問題があつた。

ノエルはハインツから借りた魔法理論の分厚い本を一ページめぐる。

短い旅の間で、すでに分かつていたことだが、文字が分からない。市井の中には文字を知らぬものもいるだらうから、旅の間は特に不便なことはなかつた。言葉は通じるのに、奇異なことだ。

「私が学んだ言語と違うんですよ。まずは文字を学ぶところからですね」

現在はハインツを横に、小さな子供が読むよつた童話を広げている。

「なぜここに絵本などがあるのかと思ったが……文字が読めないと
はな」

「読めないわけじゃないですよ。読める文字が違うだけで
字を知らないと思われたようで不快だ。」

数少ない荷物の中から帳面を取りだし、ペンで文章を書き付ける。
「これが私の学んだ文字です。残念ながら書物は失われてしまいま
したが」

今は帰ることのできないノエルの自宅にある書物の在処を尋ねら
れても困るから、すべて火事で焼けてしまったと説明した。

「異国の者か？それにしては言葉は通じるな。それに、魔法は誰か
ら学んだ？」

「親ですよ。すでに死にましたけど。だから私がどこの国流れを
くんでいるのかはわかりません」

エドヴァルトが不審げな表情になる。

ノエル自身、自分の現状は怪しく、信用するに足らない。だが、
眞実を話した方が余計、怪しい。

「ま、いいじゃないですか殿下。彼女の身分がどうあれ、生み出さ
れる魔法は本物で、その知識は必要だ。そのために文字の習得は不
可欠ですが、ノエルは頭もいいし、すぐに覚えられそうですよ」

「……そうだな」

結局は、そこに落ち着く。この魔法がある限り、どれだけ身分が
怪しかろうが、彼らはノエルが必要なのだ。

「これからは私もここに来ることにする。魔法の復活については、
最大の急務だからな。煩い爺共への説得も楽だ」

エドヴァルトの言葉は、ひいてはノエルを監視することにも通じ
ている気がした。

「私は現在、古代魔法について研究している。率直にきくが、お前の
使う魔法は古代のそれか？」

「古代魔法？」

ノエルの世界にも古代魔法は存在し、専門的に研究している者達

も大勢いる。ノエルも興味のある分野だ。

しかしこの世界の古代魔法は、当然のことながら知らない。

「しらを切るな。魔法の学徒ならば、専門的なことはともかく、さわりくらいは当然に知ることだ」

「私はこの国での一般的な魔法学を受けていませんから」

エドヴァルトの攻撃的な視線を、ノエルは受け流す。エドヴァルトは渋面を作りながら、けれど流暢に説明をはじめた。

「賢者アザルとその一派が残したと言われるアザル書とその関連書籍。発見されてから約百年、いまだに解説されていない、現代のものとは理論の異なる魔法のことだ。羊皮紙や銅板から経過年数から、少なくとも八百年前のものであろうといわれている」

「百年も経つのに解説ができていないんですか？」

「理論があまりにも現代魔法のそれと異なり、言語体系もこの世界のどこにも存在しないものだからな。第一に、古代魔法の研究は不人気だ」

「どうして？」

「その理論を解説したとして、魔法が使えるかどうかは未知数だからだ。発見された約百年前は特に、この北の大陸では三国時代のまつただ中だった。使えるかどうかもわからん古代魔法よりも、戦争で使える魔法は魔導具の研究の方に予算や注目がいく」

「なるほど　ノエルは頷いた。

「私が使う魔法が、殿下の言う古代魔法であるかどうかは分かりません」

「だが可能性はある。古代魔法については、ハインツやウルリカよりも私の方が造詣が深い。私や先達の研究結果や論文に対してもお前の感想を、ぜひ聞きたい。それに関して私が教授できる部分は、惜しまないつもりだ」

「偉そうだし冷たいが、異変の解決を望む思いと、その知的好奇心には素直に感心する。

「ありがとうございます。ではお言葉に甘えて、まずはひとつ。ア

ザル書の内容を見せてください」

「写本でよければ近いうちに準備しよ?」

応えがぽんぽんと返ってくるのは、アイク教授と専門分野で話しているときと同じような気持ちよさを感じる。ノエルの中で、エドヴァルトの評価が少し浮上した。

「そのときまでにある程度文字を習得しておくことだ。教えるにしても、現代語を知らぬようでは難儀するところもあるだろ?」

冷たく言われ、折角浮上した評価はまだ少し下がった。

「つたくあのクソ親父。話長いんだよ」

口汚く愚痴を吐きながら室内に入ってきたのは、フェルディナンだ。その後ろで、騎士服姿のミカが苦笑している。

「フェルディナンが結婚すれば済む話じゃないか?」

「今のところ予定はないよ。まだまだ自由の身でありたいからな」

結婚すれば自由などないと言いたげに、肩をすくめる。

フェルディナンは向かい合ひノエルとエドヴァルトを見て破顔した。

「対面は済んだみたいだな。おつと、こつちはミカだ。ノエルの連れ

こつちはエドヴァルト王子殿下だ、となんざいに紹介する。紹介された側のエドヴァルトは、嘆息する。

「初めてまして、殿下。ノエルの連れのミカ・ヤノです」

愛想よく挨拶するミカに対して、エドヴァルトは「ああ」などと冷淡だ。ノエルは、少し苛つぐ。

「ミカ」

「ん?」

横に置いていた絵本を差し出す。

「読める?」

受け取ったミカは紙面をじょじょく見て、顔を上げる。

「家の妖精の絵本?俺の生まれたところにも、似たような話あったよ」

「読めるの？！」

読めない、という返答を期待していたノエルは、裏切られて驚く。思わず立ち上がる。

「うん。まあ」

「なんで？旅の間だつて、言わなかつたじやない！」

「なんでって……。ノエルも読めてるもんだと思つてたし」「まさかミカの手に渡つた瞬間に、読める文字に変化したという」とでもあるまい。ノエルはミカの横に並ぶ。やはり絵本に書かれた文字は、学びはじめたばかりのノエルには半分くらいしか理解できない、見知らぬ言葉。

ノエルはミカを見上げる。

ノエルと同じように、異邦人である男。言葉はお互い、この世界と通じるが、文字には差ができるのはどうしてだろう？

「言葉が理解できるなら、ミカが教えてあげればいい。これでも、なかなか僕も忙しいから」

やれよかつたと、ハインツはノエルの教師役をミカにぶん投げた。ノエルはなにか言おうとしたが、ミカの嬉しげな言葉に遮られる。「ノエルに教えられるつてすごいな！なんでも聞いてくれていいぞ」あまりに嬉しそうなので、何も言えなくなつた。

「おい、お前にも仕事あるんだぞ？騎士見習いつてい」

フェルディナンが叫ぶ。

「大丈夫大丈夫。そつちもやるつて。任せろ」

「大丈夫かよ……」

フェルディナンが嘆息する。

「エドヴァルトはどうだ？うまくやれそうか？」

王太子との話が終わった後、フェルディナンが魔法使いのための宿舎まで案内してくれた。フェルディナンの家に泊まるのでは父親がうるさいので、宿舎に泊まることになった。ミカはフェルディナンも世話になつている騎士のための宿舎に泊まる。宿では隣同士の部屋だったのに、ここにきてミカと王宮の中とはいえ離れることがなつてしまつるのは、少し不安だった。口に出したりはしないが、そんなんふうに思いながらミカの隣を歩いていたら、先を行くフェルディナンが王太子のことを質問してきた。

「そうね……」

エドヴァルトの冷たい視線を思い出す。

「愛想がいい方ではないわね」

「ノエルが言えたうちかー？」

図星をつかれ、黙り込む。

「ノエルは愛想はないけど、慣れるとかわいいぞ」

「なによそれ……！」

ミカの、フォローになつていらないフォローを受けて、ノエルが赤くなつて言葉を荒げる。

「確かに、好きな人にノエルがどう接するのか興味はあるけど」

フェルディナンまで言い出す。

ノエルは黙秘した。決してろくなものではない。色恋に慣れていない自分は、さぞかし分かりやすく、愚かで滑稽だつただろう。

「ノエル？ 気悪くしたか？」

気遣わしげにフェルディナンが顔を覗き込んでくる。

「いいえ……そんなことないわ。王太子のことよね。魔法に対する知識欲と、知識量には素直に感嘆するわ。魔法に関して話す分には、話しやすくて、不快ではないわよ」

「エドヴァルトは失われた技術である古代魔法に、昔からはまつてた。有用性はないと、学者連中が口をそろえて別の分野をすすめたけど、あいつは頑なに古代魔法に傾倒した。有用性がないってことは割り当てられる予算も少ないってことで、それは王太子であるエドヴァルトにもどうにもできないことだつた。魔法研究会は国家直属とはいえ、完全に管理下にあるわけじゃないから。予算が少ないってことは研究者も少なくて、技術もそう進まない。それがようやく田の畠を見るかもしないんだ。積極的にならうつてもんだろ」

「なるほどね」

「エドヴァルトは、少しノエルに似てる」

「ええ？」

ノエルが不満げな声をあげる。

「あいつも大変なんだ。よろしく頼むよ」

「……私は私で目的があるし、協力するのはやぶさかではないわよ

「あ、俺もー」

横でミカが拳手する。

「とりあえずノエルに文字を教えるところかな。明日から俺のことばミカ先生って呼んでくれていいぞ」

「はいはい」

ノエルは気のない返事をする。

あまりに気のないのがわかりやすすぎたのか、なんだようと、ミカは笑いながら言つた。

「殿下とかに話さないのか？」

二人きりになつたとき、ミカがノエルに訊いた。話題にしているのは、ノエルとミカの身上のことだ。

ノエルはフェルディナンにもエドヴァルトにも魔法使い達にも、自分達の事情を話していない。世間から隔絶された場所で、隠者のように暮らしていたといつ偽りの経験だ。

「とりあえず、当分はね」

明日をも知れぬ状況ではそつそつ簡単にカードは切らないほうが多いと言つたのは、あの意地の悪い大人だった。あの大人に近づいていつているようで、ノエルは気が滅入る。

「そつか」

ミカはそれだけ言つ。

あんまりに反論もなにもないので、ノエルはミカの顔を見上げ、そして俯く。

「ごめん」

「なにが」

ミカの驚いた声。

「ミカは偽る必要はないのに、私に付き合わせてて」

フェルディナンもエドヴァルトも魔法使い達も、性根の悪いような印象はない。なのにミカが身上を偽つてているのは、ノエルに合はせているからだ。つかなくてもいい嘘をつかせている。それが、今さらながら罪悪感がちくちくと胸をさした。

「なんだ、そんなことか」

ミカは笑う。

「別にいいよ、そんなん。嘘つくことで痛むほど、良い人じゃないし、俺」

そんなことはない。ノエルは俯いたまま小さく、ありがとう、と呟いた。

ミカのそばにいると、ラインハルトのそばにいるような感覚にな

る。似ているわけではないのに。

ラインハルト 私の幼なじみであり、家族である男。光の御手。ミカの手を見る。そこに光はなかつたけれど、ぼんやりと見続けたその手がノエルの頭に触れる。それは、光をまとうようにあたたかだつた。

リュングス王宮、その王の執務室では、ちょっとした騒ぎが起つていた。

「ノエルが消えたって、どういうことなの?—」

普段の穏やかで柔らかな雰囲気はどこへやら、国立医療院の治癒術師であるトリシャが金切り声で恋人を責める。当のラインハルトは、「わからない……」と弱々しく答えて頭を振るばかりだ。その声は、少し震えている。世界を救った光の御手とは、どうていえない。

「落ち着けトリシャ。騒いだってノエルは戻つてこない」

部屋の主である国王アレクサンダー・オルテナ・グウェイネズは、そうトリシャに諭した。

トリシャは泣きそうに顔を歪め、下を向いて小さく「ノエル」と友人の名を呟いた。顔を覆つて、そのままソファに座り込む。

「どう思う? ワルター」

話を振られたワルター・アイク教授は、手元の報告書から顔を上げた。

「遺跡にはなにかの魔方陣が設置されていたのでしよう。それを、偶然にもノエルが起動させてしまったと考えるのが自然ですが、腑に落ちない点もありますね」

「腑に落ちない点?」

「ノエルがアーサー王朝時代の遺跡だと断定したようですから、間違はないでしょ。ラインハルトは、ノエルが読み解いた燭台の文字を聞いている。世界、海、境界、一つの太陽、一つの月」

「意味が分からんな」

魔法の知識のない王には、ただ単語の羅列にしか聞こえない。同じく知識のないラインハルトは反応しない。治癒術に特化しているが、魔術師であることには変わりないトリシャは、顔を上げた。

「何を目的とした魔方陣なのでしょう?」

「見てみないことにはなんとも。しかし、刻まれた古代文字を読み上げただけで魔方陣が発動するというのはあまり聞いたことがない」

「そうですね。私はあまり古代魔法は知りませんが……」

「もしくは、ノエルだから、だとしたら」

「どういう意味だ?」

王が鋭く問う。

「ラインハルト君が光の御手であるように、ノエルにも役目がある。お忘れですか、陛下?」

「忘れるわけがないだろう。ノエルや、そしてお前やトリシャの役目を」

しかし、と王は考え込む。

「そうだとしたら、まさか北の魔女が関係しているのか?今更?」「さて、どうでしようね」

見てみないことにはわかりません、とアイク教授が言つ。

「現在、遺跡の方は?」

「閉鎖中です」

ラインハルトが答える。アイク教授は王に向き直る。

「陛下、私に調査の許可を」

「与えたいのは山々だが、無理だ」

王はがしがしと口の頭を搔き、嘆息する。

「魔法学会ですか?」

「ああ。学会の狸共がノエルが姿を消したことに対して過剰反応をしている。無理もないが……この上お前を、なんてことは無理だろうな。無論、トリシャにも無理だぞ」

ならば私が、と言い出しそうだったトリシャに釘を刺す。トリシャは納得していない顔つきで黙り込む。

「お前もだぞ、ラインハルト」

ラインハルトは唇をきつく結ぶ。

「調査隊は派遣する」

「調査を引き受ける魔術師がいますか？賭けてもいいですが、出てくるのは経験のない若者だけですよ」

「そんな負ける賭けはしないさ。とにかく、この件はしばらく俺に預ける。いいな、ラインハルト」

思い詰めた顔をしているラインハルトに釘を刺す。

「俺は学会の爺共と話す。ワルター、付き合え」

「はあ、面倒な……」

「おつまえなー」

王の古い友人であるアイク教授は、うるさい侍従などがない場では、王に対しても気安い態度をとる。王の古い友人は、アイク教授の他にもうひとりいる。

「ハイノは？」

「ハイノなら例によつて行方不明ですよ」

王は嘆息する。

王のもう一人の古い友人が行方も知らせずに姿を消すことは珍しくない。むしろショッちゅうだ。

「こんなとき……」

「世間をよく知る男ですが、魔法については専門外ですよ。いても役に立ちません」

「辛辣……」

王はぼそりと呟く。

なにか？と訊ねる友人を受け流し、王は暗く沈んでいるラインハルトとトリシャの肩を叩く。

「お前達も戻れ。暇じゃないだろう。なるべく、お前達の結婚式までにはノエルを戻せるようにするから」

ラインハルトとトリシャの結婚式は、半年後だ。

「いいえ」

トリシャは強い口調で首を振る。

「ノエルが戻らない限り、結婚などしません」

王は内心、やつぱりなあとと思う。トリシャとノエルは親友同士だ。

そしてラインハルトにとつて、ノエルは。

「ノエルは俺の家族だ。ノエルが列席しないなら、結婚式はできません」

ラインハルトまで結婚式の延期を言い出す。誰よりも恋人との婚姻を待ち望んでいたというのに。

似た者同士の恋人だ。

「陛下、申し訳ありません。俺は陛下の命を、お聞きすることができないかもしません。騎士団を除籍されることにならうとも、ノエルの身には変えられない」

「私もです、陛下。医療院を追い出されことになつても、親友の身の方が大切です」

こんなところまで似なくともいいだろ？』王は頭を抱える。これから学会の爺共と戦わなければならないといつて、その前に頭を悩まされる事態にならうとは。

「お前達が何かできるとは限らないぞ」

「それでも」

北の魔女を打ち倒した、父神の力を手にする光の御手。

「俺の役目が、ノエルを助ける手のひとつになるかもしれない」

第十一話 テイーで乾杯を

次の日から、本格的に白亜宮での日々がはじまった。

簡単な絵本や書籍を教科書に、ミカに文字を齧り。ミカには騎士見習いという立場もあるので、午後には修練場に行ってしまう。なので午後からは復習をしたり、分からぬ部分はハインツやウルリカに聞いた。文字が習得できるまで書籍から学ぶことは難しいが、口頭では可能だ。ハインツやウルリカ、夕方からは仕事をあげたエドヴァルトが顔を出し、魔法に関する講義を受けた。

そうして、数日が過ぎていった。

「ノエルはほんと頭がいいなあ

生き生きと講師役を務めていたミカが唐突に呟く。
「は？」

「だつてここに来て六日くらいなのに、もう本読めるようになつてゐ
し」

先生役も早々にいらなくなりそう、と唇を尖らせる。

「私が知ってる言語に、よく似ているからよ」

「母国語に似てるのか？」

「母国の公用語じゃないわ。今は滅びた国の言葉よ」

何の偶然なのか、あるいは必然なのか アーサー王朝時代に

広く使われていたとされる公用語だ。

「単語や言い回しや、それ以外にもいろいろ違うんだけど、基本的な文法がよく似ているわ。さすがに基礎も違えばもっと時間かかるわよ」

「へえ。じゃあ殿下の論文読める日も近いな。俺はさっぱりだけど」「どうかしら。あれは専門的な単語も使われているだひうじ」

まだ専門的な分野に関しては手を付けていない。

「進んでいるか？」

噂をすればなんとやら。姿を見せたのはぐだんの王太子殿下、エドヴァルトだ。午前中に顔を出すのは珍しい。

「あ、殿下だ」

気安い性質のミカは、一人にちは、などと挨拶をしている。ノエルは会釈をするだけだ。本当に田を落としながら、ミカとエドヴァルトの会話を聞いていた。

「ノエルは頭がいいから、俺は早々にお役じ免になりそうですよ。専門用語はお手上げですし」

「専門的なことについては私が教授しよう。なにかわかつたことはあるか？」

「己に対する質問だと気づき、ノエルは顔を上げる。

「私の魔法と、この国の魔法が違うところとは分かれました」

「そうか、やはりな」

「そうでなければ殿下が使えなくて私が使える理由が説明できませんしね。ただ、殿下の研究分野のものかどうかはまだわかりません。私の語学知識がその水準には達していないので」

「この短期間でここまで覚えられるならば、近いうちに専門分野での水準にも達するだろ？」

エドヴァルトは感心したように呟つ。ここ数日のノエルの習得ぶりに、エドヴァルトは感心し、今後に期待している様子だ。忙しい身の上であろうに、毎日必ず顔を出しても古代魔法についてノエルと話しかねている。ノエルの魔法がこの世界で古代魔法と認識され

ているそれかもしれないという理由もあるだろうが、半分くらいは、今まで己の専門分野で話ができる人間がいなかつたからなのかもしない。この数日書籍をあさつただけで、この世界での古代魔法の人気のなさがわかつた。書籍や論文の数に、人気の度合いが明らかに顕わされていたからだ。

「そういえば殿下、写本は？」

「この異変で、写本が魔法研究会の研究対象となつてることを忘れていた。異変前までは見抜きもしなかつたくせに」

エドヴァルトは恥々しげに言つ。

「第一、研究会ではほとんど解読は進んでいない」という話だ。悪いがしばらく待つてくれ

「分かりました」

どちらにせよ、文字を習得するにしても論文を読むにしても、やることは山積みだ。

エドヴァルトの熱心な話を聞きながら、分からぬ単語を聞く。手元の論文と照らしながら進めていくと、少しずつ内容が明らかになつてくる。

朝から文字を見ていたからか、視界がかすむようになつて、ノエルは手のひらで目をこする。

手持ちぶさたでそじらぐんの本を読んでいたミカが、それを見て、ノエルの手を掴んだ。

「なに？」

「目、疲れた？」

そうかもしけない。この数日、文字とにらめつばかりしていたから。

「そうね、少し」

「そうだな……もうこんな時間か。休憩を挟むといい。私は執務に戻る」

立ち上がったエドヴァルトを、ミカが「ちょっと待つて」と止める。

「……じぱりへりもつぱなしだし、王都を散歩してもいいですか？」

「散步？」

「折角王都に来たのに、ノエルは王宮にこもつぱなしだし。殿下血慢の王都でしょ」

「血慢というわけでは……」

エドヴァルトは言葉を濁す。

「別にいいわよ。好きでこもつてるんだもの。一応私だつて研究者だし、いつものことよ」

研究院では、大きな実験のときには、ひと沢山まみり込むこともぞらだつた。

「疲れるんだろ？ 散歩でもして身体動かした方がいいって。それに、こないだ見回りで街に出てみたけど、きれいな街だつたよ」

「ふーん」

少しは興味がある。

「王都からは出ないし、治安の悪そうなところは把握してるから行きませんよ。今日中に帰つてくるし、いいですよね？」

エドヴァルトへの問い合わせ。

対するエドヴァルトは、考え込んでいる。

「別にいいんじゃないですか、殿下。ノエルと僕らは利害の一一致で結びついているんだし、逃げたりしませんよ」

思わず援護射撃は、ハインツだ。奥の部屋から大量の紙類を抱えて出てくる。紙類を適当に放り投げたハインツは、ねえ、と確認するようにノエルに問いかけた。

「逃げるんだつたらいつでも逃げられるわ」

「だよねえ」

ハインツは笑う。

「そうではない。万が一他国や、私をよく思わず王宮の者に知れていいたら」

「拐かしどかの心配ですか？ 拐かそつたつて、難しいと思います

けどね

なにせこの世界の人間は魔法を使えず、対してノエルは自由自在に魔法を操るのだ。

「……分かった、いいだろ?」

ただし、とエドヴァルトは言つ。

「フェルディナンを連れて行け」

監視ということか。ノエルは思つたが、口には出さなかつた。
エドヴァルトはハインツの研究室を出ようとしたが、ふと立ち止まつて振り返つた。

「財布代わりにもしていいぞ」

「なら僕も行こうかな」

ハインツが言い出す。

「お前はそんな暇があるなら部屋を片付ける」

言い置いて、エドヴァルトは出て行つた。

片付いてるのに、とハインツは口をとがらすが、ノエルとミカの
目にには、そつは見えなかつた。

「俺も忙しいんだけどねえ」

全部俺に押しつけやがつて、とフェルディナンはぼやく。しかし
そつしながらも、案内はきちんとしてくれている。

四つの郭と下町に分かれる王都。一の郭の王宮から下り、ここは
四の郭、庶民の街だ。街の中心である広場では、庶民や行商で溢れ

ている。まだ昼時で日が高いので、女性だけの集団や子供達の遊ぶ声も聞こえる。異変の後、日が暮れると大通りでも女子供では歩けないと言われているが、昼に見ているぶんには治安の悪さは感じない。

「賑やかね」

「街の中心だからなあ。まだ昼だし。どうする？何か食うか？」

「そうね、お昼だし」

昼食はとらずに出てきたので、そろそろ空腹を覚えている。ミカも隣で腹減ったななどと呟いている。

「うまいところがある。行こう」

フェルディナンが先に立つて歩き出す。

「こ」だ、とフェルディナンが立ち止まつたのは、オープンテラスのある可愛らしいカフェだつた。ターゲット層は明らかに若い女性だ。以前フェルディナンにお勧めだと紹介された食堂のような店を想像していたノエルとミカは、胡乱な目つきでフェルディナンを見る。まさか店の中の女性が田当てなのか。

「いやいやいや、ホントにうまいんだって。カフュつたつて馬鹿にすんなよ？ここのおーナーとは知り合いで」

「あら、フェルじゃない、久しぶりね」

フェルディナンの言い訳めいた言葉に割り入つてきたのは、若い女性の声音。店の中から現れたのは、ほつそりとした体躯の妙齢の美女だつた。ウエーブのかかった黒髪が肩に落ちているのがなまめかしい。ノエルはぎくりとする。こうこつた妙齢の女性は、苦手だ。

「やあエレーナ、久しぶりだな」

「あんまり姿を見せないから、死んだのかと思つたわ」

「おいおい、勝手に殺さないでくれ」

エレーナと呼ばれた女性は、ノエルとミカを見る。

「珍しいわね、お連れ様？」

「ああ、うちで世話してる天才魔法使いと普通の騎士見習いだ」

「普通のってなんだよ」

フェルディナンの紹介に「普通」と評されたミカがぼやく。その

様子に、ノエルは少し笑う。

「天才」だと評されることが多かつたノエルは、特に何とも思わない。

「まあ……魔法使い、さんなの」

エレーナの瞳が痛ましげにノエルを見る。

ノエルは不思議に思う。

「職にあぶれてってわけじゃない。例の異変の解決のために、俺が頼み込んで王都に来てもらつたんだよ」

フェルディナンが慌てて言い添える。

エレーナは、異変があつて職にあぶれた魔法使いが、フェルディナンを頼つたふうに思つて痛ましくノエルを見たのか。

「そうなの？すごいわね。まだ若いでしょ？」

エレーナは店の中を手で示す。

「立ち話もなんだし、どうぞ、中へ。サービスするわ」

フェルディナンが、行くぞ、と言つて店の中に入る。

財布はフェルディナンだ。腹が膨れさえすればいいか、と思つて、ノエルとミカはその後に続いた。

店の内装もまた若い女性向けの華やかで優しげな雰囲気だ。フェルディナンはエレーナに案内されたテラスのテーブルに座り、慣れた様子で飲み物を頼んでいる。

「ノエルはフルーツティーでいいか？甘味は？」

ノエルが何気なくメニューを見ると、ティーひとつとっても恐ろしく種類がある。最近習得した文字と照らしてみても、一部分からないものもあるほどだ。

「それでいいわ。甘味入りで」

「あらだめよ、お嬢さん」

面倒なのでフェルディナンに任せようとしたら、エレーナが口を出してきた。

「うちにはこだわっているの。そんなふうに適当に決められない。

れたら店主として悲しいわ

エレーナは鼻を鳴らして指で田尻をぬぐつ。あからさまな泣き真似だ。

「天才魔法使い様に、一番のティーザーをプレゼントしたいわ。今のお悩みは？心のお悩みでも、身体の不調でもいいわよ」

まるで医者のようだ。苦手な女相手に悩みを打ち明けるなどもつてのほかだが、こつまでも注文ができないのでは空腹が我慢できないので、ノエルは仕方なく付き合つことにした。

「ここにいろいろ本ばかり読んでいたから、目が疲れているわ。心の悩みは特にないわ」

元いた世界に帰りたいという願いや、この異変がそれに繋がるのかといった不安はあるが、それを話してもエレーナには通じない。身体の不調なら簡単に言つてしまえる。本当に本当の、心の悩みなど打ち明けられるはずもない。

「そう」

エレーナはどう思つたのか、年若なノエルには手の内など読めない笑みを浮かべた。

「なら田の疲れに効くティーをお出しするわ。甘い方がいいのね？」

「ええ、まあ」

子供っぽいと思われただろうか。

しかしエレーナは馬鹿にしたふうでもなく、わかつたわと頷いた。

「そちらの騎士様は？」

エレーナがミカに目を向ける。

「俺？」

「ええ。お悩みとか、身体の不調はないの？」

「悩みかー」

この脳天気なきらいのある男に悩みなどあるのだろうか。否、この世界に来るまでいたという精霊の塔のことなど、ミカのことばかりないことだけなのだから、表面上のこととで決めつけるのもよくない。

「今のところはないかな。前はあつたんだけど　忘れちゃったし」

「忘れたって、なにそれ」

ノエルは呆れる。

「忘れちゃったんだよ。今が結構楽しいからさ。ノエルもいるし」
ミカはそう言って脳天気に笑う。

この男は、深刻な悩みとは縁のない人間なのだろうか。ノエルは呆れて嘆息する。その様子を横で見ていたエレーナは、くすりと笑う。

「わかつたわ。天才魔法使い様と騎士様にとつておきのティーをプレゼントするわ」

「俺は？」

フェルディナンが苦笑する。

「勿論、フェルにも心を込めて淹れるわ」

少し待つていてね、と言い置いて、エレーナは奥へ引っ込んだ。

「さて、食事はどうする？まさかティーで腹が膨れるわけでもないしな」

フェルディナンがメニューを差し出す。どうしてティーの種類より食事の種類の方が少ないのだろうか。理解に苦しむ、と思いながら、ノエルはメニューの中から適当な食事を頼んだ。ミカも同じようを選んだ後、お花を摘みに、などと変に可愛らしく言って手洗いに立つた。

そうしているうちに、エレーナが手ずからティーを運んできた。
ミカが戻ってきたのも同時だった。

「さあどうぞ、召し上がり

言いながら、エレーナは椅子に座る。なぜ店主が椅子に座るのだ、とノエルは疑問に思うが口には出さない。代わりに、いただきます、と呴いてティーを口にした。すつきりとした味わいの、ほのかにフルーツの甘みが舌の上を滑っていくようなティーだ。

ノエルは思わず、ほう、と息を吐き出す。温度もノエルの猫舌に合わせたかのように丁度いい。琥珀色の水面を見ながら、そつとエ

レーナを見上げる。

「おいしい？」

「……おいしいわ」

素直に答える。

「よかつた。おかわりがあるから遠慮なく」

「いただくわ」

茶器を空にしてソーサーに置くと、新しいものが注がれる。

「一の郭にいらっしゃるなり、ちよつと歩くけれど、時々は来ていただけたら嬉しいわ。可愛らしきお客様はいつでも大歓迎だもの」

「ええ、そうね」

ノエルは素直にそう答えることができた。エレーナのような女性男の欲を誘うような美貌と肢体を持ち、媚びるような態度の女は、正直苦手だ。あの大人が連れて歩いていたからだった。けれど先入観ばかりで人を判断するのもよくないな、とノエルは自らを省みて反省した。

「ミカのは? おいしい?」

ノエルが訊ねる。

「うん。つまい。なんだろ、フルーツっぽい感じ。音楽を聴きながら本を片手に優雅に飲みたい。南国で」「なにそれ」

ノエルは吹き出す。そういうふた図を思わず想像してしまった。「ティーのおかげでリラックスできた? やっぱり部屋にこもるのはよくたいぞ。たまには外に出た方がいい」「そうね」

「ノエルが素直だな。ティー効果か」

まるでいつもは素直ではないかのようだ。確かにいつもは、こうもすんなり頷いたりはしないかも知れないけれど。

「この後はどこに案内してくれるんだ?」

ミカが訊ねる。

フェルディナンはティーを口にしながら答えた。

「そりなんだよな。ノエルがいるから色々いとこにはだめだしな
「私がいなきや行くわけ？こんな真つ昼間から？」

「冗談だよ、冗談。エレーナはどう思う？」「こいつら王都ははじめて
なんだ。いいところに案内してやりたくてさ」

「そうねえ」

さすがに王都に店を構えるだけあって、エレーナにとつて王都は
庭のようなものだった。いくつか通りの名前や店の名前があげられる。

食事が運ばれてくると、空腹も手伝って大いに舌鼓をうつた。仕
事はいいのかといったくなるくらい、エレーナはほとんどノエル達
のテーブルにいた。エレーナの会話は話題が豊富で如才なく、苦手
意識を持っていたはずのノエルでさえ引き込まれた。

ふと、こんな女性になれたら、あの大人はノエルを女として見て
くれるだろうかと考えた。すぐにその考えを否定する。ノエルはエ
レーナのように女らしい美貌と肢体を持つことは叶わないし、奇跡
的に手に入れることができたとしても、誰に対しても如才のない会
話やたくさんのお話の引き出しへ持てそうにない。ノエルは人見知
りだし、興味のない話にはとことん興味がない。

なれども、と少しだけ落ち込む。ノエル自身さえ意識しな
かつた小さな小さなため息を聞きとがめたのか、ミカがどうした、
と視線を向けた。

「なんでもないわ」

ティーを飲む。すつきりとした落ち着いた味。ノエル好みのほの
かなフルーツの甘み。

「また来よう。でも、来るときは一人じゃダメだぞ」

子供扱いかと、ノエルは先ほどまでの考え方もありまつて渋い顔
になる。

「ノエルは女の子なんだからさ」

女の子という言い方には、様々などらえ方がある。子供としても、
年頃の少女としてもおかしい呼称ではない。ミカの言い方には、子

供に対して言い聞かせるようには聞こえなかつたので、ノエルは不機嫌を引っ込めて頷いた。

「そうだな。いくらノエルが強いからって、やっぱ危険だしな」

フェルディナンも頷く。

ノエルとミカ、そしてフェルディナンには通じる話だが、今はどんな魔法使いでも魔法が使えないだけしか知らないエレーナは、不思議そうにノエルを見た。

「そんなに強いようには見えないけど……」

意外ねえ、と感嘆する。フェルディナンは自分の失言に、大いに慌てて誤魔化している。

ノエルとミカは、顔を見合わせて、エレーナに見えないようにくすりと笑つた。

会計は案の定、フェルディナンが一括して支払つた。王太子から「財布にしていい」と言われてるので、ノエルとミカは遠慮なく財布にさせてもらつことにした。

店を出るときに、エレーナがそつと近づいてノエルに耳打ちをした。

「魔法使い様が熱いものが苦手だつて、騎士様が教えてくださつたのよ」「ミカが？」

驚いた。手洗いに席を立つたときだらうか。

「飲み物をふうふうしながら飲むの、いつも見ていたんですけどてもいい人ね」

いい人の言い方に、良い人ではなく好い人の調子を読み取つたノエルは、誤解よ、とエレーナに言つた。

「あら、でも、騎士様は魔法使い様のこと、とても大切なようだつたわ。あなたも騎士様を大切にね。またいつでもいらしてね、魔法使い様」

「ノエルでいいわ」

「そう、ノエル。では私のこともエレーナと」

「ええ、エレーナ、また今度」

第十二話 アザル書

「待たせて悪かった。これがアザル書の写本だ」

そう言つてエドヴァルトが差し出したのは、少々古ぼけた数冊の本だった。

これがアザル書の写本。

「写本も貴重だ。触るときはグローブを付けてくれ」

「わかりました」

ノエルはうなずき、グローブをつけて一番立派な装丁の写本を開く。

「へーこれが写本かあ。はじめて見るわ」

写本を届けると聞いて、ハインツの研究室にはウルリカの姿もあつた。

ノエルの手元の写本をのぞき見て、興味深げに言った。

「宫廷魔法使いなのに?」

「宮魔法使いつていつても下つ端だから。写本みたいに超重要文献を見るつてなると、面倒な手続きが必要なの」

「これ、超重要文献なの?」

エドヴァルトの話を聞く限りでは、古代魔法は人気のない研究項目だ。それに関連するものでも、超重要文献に該当するのだろうか。「そりやそうよ。年代物で、世界に3つしかないものだもの。内容なんて関係なし」

「写本なんだから写せばいいんじゃないの?」

「貴重品を所有してゐつていうのが大事なのよ。魔法学発展の癌よね、魔法研究会の爺共つて」

皮肉げにウルリカが言う。

大きな組織の上層部というのは、どこも同じなのか。ノエルの祖国の魔法学会でも、似たような問題がある。それでもノエルの国では、国王や側近がことの解決のために動いている。

こんなことを考へてゐる場合ではない。ノエルは写本のページを一枚一枚とめくつていぐ。最初の何枚かは文字もない。本文に差し掛かつたと思われるページに辿り着いたところで、ノエルの指が止まつた。

「これは……」

「わかるのか?」

エドヴァルトが後ろから問いかける。

ノエルは文章を田で追う。この文字。これは。

(古代文字だわ)

古代文字は、ノエルの世界の現代魔法にも使用される知ある文字だ。アーサーン王朝期以降に発見されたものも含め、すべての魔法使いが少なくとも124字以上は習得する必須項目。ノエルは124字よりずつと多くの文字を暗記しているし、その配列から生み出される魔法も熟知している。

しかしこの写本に記された古代文字は、ノエルの知る配列とはまったく異なる。これでは意味が通じず、破綻してしまつ。

(でも、どこかで見たことがある そうだわ)

あの遺跡。燭台や岩に刻まれていた不思議な配列と、同じだ。

あのときノエルは、古代文字研究の専門家を連れてくるべきだと思った。ノエルは専門ではないからだ。だからここにある写本も、すべてを解読しようと思つたらかなりの時間を要するだろつ。

それに。

(どうしてここに古代文字が?)

これだけではない。この国の公用語の、アーサーン王朝期の公用語との相似性。この国とノエルの世界は、なにか関係があるのだろうか?

難しい顔で黙り込んでしまつたノエルにしびれを切らしたのが、エドヴァルトがその肩に手をかけた。

「なにを考えている」

ノエルははつとして振り返る。思わずエドヴァルトの手をはたき

落として、気まずそうな顔をする。はたき落とされた方のエドヴァルトは、自分の手を憮然として見た後、同じ表情でノエルを見た。

「それで、何がわかった？」

「……見たことのある文字です」

「読めるのか？」

無礼な態度をとられたことも忘れたように、エドヴァルトがノエルの肩を掴まんばかりに迫る。その表情は、わかりにくいが常より輝いている。ノエルは最初、エドヴァルトを氷のようだと思ったが、殊古代魔法のこととなると、まさしく氷解する。ノエルもよく知る、輝くような知的好奇心でその瞳が満ちるのだ。

「残念ながら。私の知る配列……文法ではないようです」

「解読は」

「やつてはみますが、専門ではないので。時間はかかるかと」

「一部だけでもわからないか」

「少し時間をください」

エドヴァルトは「本に目を落とす。

「お前がこの文字を見たというのは、どこでだ？」

エドヴァルトの質問に、ノエルは正直には答えられない。

「両親が所有していた本です。今はもう焼けてしまいました

「……そうか」

ノエルの返答にこどう思ったのか、エドヴァルトは平坦に言った。
「一部だけでも解読できたら教えてくれ。共に発見された古文書の内容からして、ここには当時明らかにされていた古代魔法のすべてが書かれているはずだ」

アザル書と共に発見された古文書は、ノエルも論文で見知っている。アザル書と関連のあるその古文書は、現代に伝わる公用語とも繋がりのある文字で、解読は容易だつたらしい。だがそこには、古代魔法の教えというか、所謂教義や教訓、指針のようなものしか書かれていなかつた。それはそれで大切なものが、エドヴァルトや志を同じくする者たちの、真に知りたいものではなかつたのだ。

「……わかりました」

果たして賢者アザルは、ここに何を記したのだろうか。

＊＊＊

「もう俺必要ないな……」

ほとんど自在に公用語を読めるようになったノエルの姿に、ミカは肩を落とした。

「殿下に専門用語教えてもらひるようこした方がいいんじやないか？」

「そうね……。でも、殿下はアザル書を優先しろって言うかもね」「アザル書？」

ミカは首を傾げる。

「賢者アザルとその一派が残したと言われる古文書よ。ここにあるのは写本だけだ。百年経つても解読されていないんですって」

「ノエルは解読できるのか？」

「文字を見たことはあるわ」

ノエルは隣の部屋にこもったままのハインツに聞こえないよう、声を潜める。

「私の世界の、遠い昔に滅びた国が発見した、魔法に使用する文字よ」

[写本に記されていた文字は、アーサーーン王朝後期までに発見された文字だけだった。それ以降の歴史の中で発見されてきた知ある文字は使用されていない。ノエルの世界で発見されたのであれば、ア

－サーーン王朝後期の人物が記した本であるとほぼ断定できる。

「なら、解読もできるんじゃないのか？」

「そう簡単な話じゃないわ。見たこともない配列なんだもの。文字ひとつひとつ意味を知っていたって、配列がバラバラなら意味が通じないわ」

逆を言えば文字ひとつひとつだけを見るならばわかるということだ。配列を気にせずわかる文字だけなぞつていけば、あるいは燭台に刻まれていたものと同様の文字が発見できるかと思ったが、半分くらい見た段階で見つからず、面倒になつて後回しにした。

「俺も見てみたいな、写本」

「別にいいわよ。ここにあるから」

ノエルはグローブをつけた手で写本を開く。紙面いっぱいに記された古代文字。古代文字研究の連中が見たら、垂涎モノだとノエルは思う。

ミカはしばらく見入つていた。

「知と峻厳の魔女」

「え？」

「ここに書いてある。ちょっと読めない部分もあるけど、ナントカ王の御代、極北の地にて知と峻厳の魔女狂態する、かな？」

「よ、読めるの？」

「半分くらい読めないけど」

ノエルは混乱した。ミカがノエルさえわからない古代文字を読めるということにもだが、その内容にも驚いた。

知と峻厳の魔女。それは、北の魔女の異名だ。

（北の魔女……）

「ナントカ王ってところは？」

「読めない。人名じゃなくて、その人を表す象徴みたいな感じだけど。強いとか弱いとか、有能だとか無能だとか」

「どういう感じ？」

アーサーン王朝後期の歴代の王なら記憶している。一致すれば間

違ひなく、アザル書はノエルの世界と関係のあるものだ。

「このへんの文字、かな？」

ミカが文章の一部を示す。

「知恵とかバランスの意味ね」

「あとは……処女、かな」

言いにくそうにミカが言う。

（処女……？）

「マリア・ローズ女皇帝？」

「誰？」

ノエルが唐突に呟いた人名に、ミカは問う。

「アーサーン王朝……昔滅びた国の、後期の王よ。未婚で、在位も短かったといわれる。退位の理由は、国を捨てたから」

そう、ちょうどその時代に、北の魔女は歪んだのだ。極北の地で。そして数年後、マリア・ローズは姿を消した。だから彼女は国を捨てた王として、長くその名を歴史の闇に葬られていた。古文書の中で、数少ないマリア・ローズの記述にはこうある。魔法に長け、知識深い女性であったと。政治はほとんど政務官に任せ、自身は魔法学の研究に熱心だつた。魔法学に傾倒するあまり、女性であることを厭うようになった。その時代は、あまり女性の研究者はいなかつたからだ。だからマリア・ローズは、女性的なその名で呼ばれることを好まなかつた。当時彼女は、尊称と呼ばれる名で呼ばれることを好んだという。

マリア・ローズ・アザル・クイントウス・アーサーン。

尊称は、“アザル”。

「賢者、アザル……」

「ノエル？」

難しい顔をして黙りこみ、唇に指を当てて考えこんでしまったノエルを、ミカが呼ぶ。その声に応えるように、ノエルはゆっくりとミカに視線を向けた。

「どうした？」

ノエルの顔色は悪い。元から筆りがちで肌の白いノエルだが、今は青白い。ミカはすべらかな頬にそつと手のひらを乗せた。

「顔色悪いぞ。休むか？」

「……だいじょうぶ」

そう言いながら、ノエルの様子は大丈夫そうではない。

「横になつたほうがいいって。ハインツには俺が言つとくから。殿下やフェルディナンが来たら、なんでもかんでも押し付け過ぎだって怒つとくし」

ノエルの少し冷えた頬を温めるように手のひらを乗せ、ミカは言い募る。ノエルは苦笑した。

「殿下に怒つたら不敬罪じやないからな？」

「俺はこの国の人間じやないからなあ」

「……そうね。でも、なんでミカがこれを読めるの？」

突然研究者の顔に戻つてしまつたノエルに苦笑して、ミカは手を離す。これ、とノエルがちらりと視線を向けたのは、写本だ。

「なんでつて言われても……読めるもんは読めるから」

「なによそれ……」

さも簡単そうに言われると、読めないノエルとしては悔しい。先ほどとはうつて変わつていつもの調子に戻つてしまつたノエルを、ミカはまぶしそうに見る。

「精靈の塔で、精靈にたくさん本をもらつてさ。暇だつたから読んでた」

「精靈？」

「ああ」

ミカは頷く。

「その本は？」

「塔に置いてきたよ。持ち出す暇なんてなかつたし」

読みたかった?とミカはからかうように問う。

「読みたいに決まつているでしょう。こんな配列の違う古代文字が読めるなんて……」

ミカが読んだのは、写本のほんの最初の部分だ。このまま進んでいけば、エドヴァルトが望む古代魔法の理論が記されているのだろうか。アザル書を記したのがマリア・ローズだとしたら、その古代魔法はノエルの知るそれなのだろうか。しかし古代文字の配列が異なっているところを考えると、違う場合もある。

なんにせよこの話は、まだエドヴァルトにはできない。

「ミカ」

「なに？」

「悪いんだけど、アンタが古代文字を読めることはない、殿下には黙つてくれない？ 今読んだその内容も」

「分かった。黙つとく」

あんまりにもあっさりと頷くので、ノエルは肩透かしをくじつ。少しば疑惑を挟まない？

ノエルはミカをねめつけた。

「ノエルがその方がいいって判断したんだろう？ だつたらきっと、その方がいいんだよ」

「そりかしら？ 私だつて間違つことくらいはあるわ」

「間違えたつてわかつたら、正せばいいだけだろ。俺も手伝つから」

ノエルはぎゅう、と眉根を寄せた。

そうしないと、ものすごく締りのない顔をしてしまった。頭を切り替えるために、事務的なことを囁つ。

「それと、これから写本の解説、付き合つてもいいわよ」

「講師続投つてことだな」

「そうなるわね」

ミカは嬉しそうな顔をする。その表情に、毒氣を抜かれてノエルは肩を力を抜く。からかうよつと言つた。

「よろしくね、先生」

第十四話 講義

「それで、ここはどうなるの？」

「えーっと、黄金と風の地にて光を手にする者が……」

「黄金と風の地……中央大陸の南かしら。金鉱と砂漠地帯があるし。光を手にする者つていうのは、光の御手のことね」

ノエルとミカは、アザル書の解読を進めていた。

文字を解読するのは主にミカで、ノエルは歴史の知識をもとに内容を解き明かすことに集中していた。

「光の御手？」

「父神の力を扱うことのできる人間のことをそいつの。当代の光の御手は、ラインハルト」

「ああ、ノエルの幼なじみの」

そう、とノエルは頷く。

「ボンクラなんだけど、あれは普通の人間には扱えない父神の力を扱うことのできる、特別な人間なの。あれ以外に、北の魔女は倒せない」

「じゃあつまり、ここに書いてある“光を手にする者”が北の魔女を倒すことのできる唯一の人つてことは、この次は」と、ミカが次の文字を指さす。

「確かにこの文字の意味は、百合、それから栄光……」

ノエルがこれまでの解読作業を思い出しながら呟く。

「百合は“祝福”を意味していて」

「その次がマリア・ローズのこと言つてるから、つまり黄金と風の地生まれの光の御手が王マリア・ローズの祝福を受けた、みたいな感じかな」

「そうね、ここはこの光の御手は、マリア・ローズ女皇帝時代のことになるから、確か名前は……」

ノエルは唇に手を当てて考えこむ。

「光とか希望とかそんな感じっぽいけど」

「そうそう、レイ・アレクシスだわ！でも、結局この人は北の魔女に敗北するよね……」

北の魔女に敗れたがゆえに、後世に名前くらいしか伝わらない光の御手。それはなにも、レイ・アレクシスだけではない。むしろそういうった光の御手の方が多いほどだ。勝利した北の魔女を打ち倒したのは、レイ・アレクシスから数えて二代のちの光の御手だ。

「この本、ノエルの世界の歴史が書いてあるだけで、殿下がいうような古代魔法っていうのは書かれていないな」

「そうね、殿下が知つたらがっかりしそう」

「いや、ほら、まだあるし」

まだ解読の進んでいない部分を指し示して、ミカがフォローする。「でも、マリア・ローズが姿消すまでの歴史だとしたら、このあと大事が目白押しよ。第2次魔女大戦がはじまって、連合軍が編成されて、北大陸のそこそこで争いが勃発する……」

「うわ……」

戦争か、とミカが絶句する。

「途中、飛ばして読めないかしら」

「順番に読んでいかないとわかんなくなると思つ。俺だってスラスラ読めるつてもんじやないし」

「そうね……」

文字知識の異様に高いミカのサポートを得てさえ、アザル書の解読は1日に10ページも進めばいいほつた。この解読は内密に進めなければならない上に、ミカには騎士見習いとしてやることがあるし、ノエルもそうだ。

「今日はこのへんまでにしとくか

「え。まだできるでしょ？」

ミカがそつと本を閉じたので、ノエルは慌てて顔を上げる。

「これから殿下たちに魔法講義するんだろ？俺も鍛錬あるし

「あ、そうだった」

「この国の文字をほとんど覚え、本を読むにも不自由しなくなつたノエルは、ようやくこの国の魔法の成り立ちや論理を学ぶことができた。最近ではエドヴァルトに専門用語の講義も受けている。そしてはじめて、かねてから考えていた推測ノエルの使う魔法とこの国の魔法が、だいぶ異なっていることがはつきりした。

基礎理論を本やハインツから学び、試しにほんの小さな魔法を使つてみようとしたのだが、ノエルの小さな手のひらに、力は生み出されなかつた。つまりノエルもまた、この世界の魔法は使えないということだ。これが異変に起因するのか、そもそもノエルには使えないものなのかは判断のしようがない。

ノエルがエドヴァルトたちに魔法を教えれば、再び彼らは魔法を使えるようになるだろ？ だとすれば、異変の解決に近くなるだろ？

「頑張れよ」

ふわりと髪を撫でられる。

髪が揺れ、ほんの一瞬、指が地肌に触れる。その感覚は、心地よかつた。

「うん、わかってる

＊＊＊

「この“知ある文字”とやらを覚えれば、お前の知る魔法が使えるんだな？」

ノエルの差し出した紙面を指さし、エドヴァルトは訊いた。

「そうだったらいいと私も思いますけど、100%そうだと私は言えません」

エドヴァルトの表情が、少し翳る。

「殿下たちが私の知る魔法を使うことができれば、原因は殿下たちの知る魔法にあることになる。私も使えませんでしたしね」「どうやら僕らの魔法とノエルの魔法はかなり違うみたいだから、可能性はあるね」

ハインツが同意する。

「見慣れない文字ね……。ひとつひとつに意味があるのね」
ウルリカが紙面を見下ろす。

そこには、ノエルが手すから書き上げた知ある文字124字の図形と意味が書かれている。ラインハルトが覚えるのは無理だと言つた、基本中の基本の124字だ。覚えるだけで、明かりの魔法くらいは使えるようになる。試金石にはもつてこいだ。

「これを使うことができたら、その先は？」

「私の魔法と殿下たちの魔法の差異を、ひとつひとつあたつて潰していくしかないと思います。殿下が望むなら、理論やこの先の文字を教えますよ。124字だけじゃ、明かりを灯すとか火をおこすべしらいしかできませんし」

「それはいいな。ぜひ頼む」

エドヴァルトは即答した。

ノエルは思わず表情を緩める。

「なんだ」

それに気づいたエドヴァルトが、どこか不機嫌そうに訊ねる。

「殿下のそういうところ、好ましいと思います」

自らの望む場所にたどり着くために努力する姿勢は、同じ魔法の学徒として尊敬できる。

エドヴァルトはノエルの返答にわずかに瞠目し、照れ隠しのよう
に鼻を鳴らした。

「124字か、結構大変だねえ」

ハインツが辟易したように言つ。

「大変とか言つてないで、5日で覚えてよ」

「五日あ？！冗談でしょー。図形だけならともかく意味だつてよくわ
かんないものばかりで」

悲鳴のように叫んだのはウルリカだ。

「一日も早く異変を解決したいって言つたのはどこの誰。魔法大国と呼ばれたほどの王国の、宫廷魔法使いならできるでしょ？」

ウルリカの悲鳴のような反論に、ノエルは冷静な声で返す。

「私の頭には知ある文字が千数文字は入つているわよ」

小さな頃から研究者である親のもと、すぐ傍に魔法がある環境で育つてきたノエルと、今はじめてこの文字と出会つたウルリカたちでは話にならないし、ノエル自身厳しいことを言つてはいる自覚はあるが、ゆつくりはしていられない。

ウルリカは返答に詰まる。

彼女もまた幼い頃から神童として将来を期待されてきた身だ。できないと言つるのは己の矜持が許さないのだろう。

「話は以上よ。5日後またここで。くれぐれも頑張つて」

「写本はどうだ？」

エドヴァルトは退室する直前、そんなことを言つた。2日に一度は尋ねられることだつた。

「難航しています。少しずつ進んではいますが、殿下の望むような内容は、まだ、報告に届けているぶんが全てです」

嘘だ。

エドヴァルトのもとに届けられる報告も、ノエルが改ざんしたのだ。まだ事実は告げられない。報告はすべて嘘だつたのだと告げたとき、エドヴァルトはどうするだろう？怒るだろうか。（怒るだろうなあ……）

そのときは素直に謝るしかない。

「……そうか」

エドヴァルトはそれだけ言った。

「ノエルうう！！」

人の名前を叫びながら、ウルリカがハインツの研究室のひとつ今はノエルの研究場になつている部屋 の扉を豪快に開けたのは、それから4日後のことだった。

ノエルはミカと写本の解読中だつたが、慌てて訳文をまとめていた帳面を隠す。念のためにノエルの世界の言葉で書いていたので、見られてもウルリカには読めないが、何しろ驚いていたのだ。

「な、なに、驚かさないでよ！」

「そんなことより！」

ノックするのがマナーだろ？と抗議するノエルを無視して、興奮氣味のウルリカが量の多い黒髪を邪魔そうに後ろに払いながら足早に歩を進める。ノエルの目の前まで来たウルリカは、「見てて！」と叫ぶと、おもむろに手のひらをかざし、口の中でも小さく何事か唱えた。ノエルにはそれがなんなのか分かつた。知ある文字。魔法の言葉。

ウルリカの手の中に、火種にしかならないような小さな炎が生み出される。

ミカはぎょっとして机の上に乱雑に広げていた紙類と写本を自分の方に寄せた。

「こ、こんなところで火熾すなよ！稀覲本だぞ写本は！」

メモ用紙程度ならともかく、写本を燃やしたらエドヴァルトなんと謝ればいいのかわからない。ノエルは念のために写本を自分の後ろに隠した。

「『めんごめん！でもほら、すごい！魔法！魔法だよ！』手のひらの中の小さな炎を示して、ウルリカははしゃぐ。まるで子供のようだ。

「五日じゃ無理とか言つてたのに」

ノエルは四日前のウルリカの言を引き出して笑う。ウルリカは「まあ、私の天才的記憶力の賜物よ」とうそぶいた。

「うるさい」と思つたら、やっぱりウルリカか」

隣室からハインツが姿を見せた。わざとらしく片耳を塞いでいる。ウルリカはフフン、と鼻を鳴らして胸を張り、手の中の火をハインツに見せつけた。

（あ……）

ノエルはまずい、思つたが、遅かった。

「見なさいハインツ！この私が生み出した火を！」

日を浴びてオレンジに輝く小さな炎。

ハインツは、少し瞠目してにこりと笑う。

「ウルリカもできたのか、よかつたな」

「は？」

「僕も昨日できただからノエルに報告してたんだ」

「はあ？！」

ウルリカがぐるりとノエルを振り返る。

蛇に睨まれたような格好のノエルは、身体を少し引いた。ついでに隣にいたミカも引いた。般若もかくや、という表情だ。

「昨日、ハインツに見せてもらったのよ。でもウルリカが使えたことではつきりしたわね、皆にも私の魔法が使えるつてことが」

表情を歪めて悔しがるウルリカに、この報告も無駄ではないのだ」とフォローする。それでも、ウルリカは冷めやらぬようだ。ノエルは知らないことだが、同門のハインツに対するウルリカの負けん気

は相当のものだ。

「まさか殿下も？！」

はつとしてウルリカが聞く。ビリだけは嫌なようだ。四日前に期間を五日後としたのだから、トップとかビリとか関係ないのではとノエルは思うが、口にはしない。

ウルリカの問いにノエルは首を振った。

「殿下からは特になにも。といつかこの四日会つてないわ」

「殿下も忙しいからね。二ルとの情勢のこととで外交部と会議しているようだよ」

大変だね、とハインツがまるでひと事のように言つ。自分の国のことのくせに。

「そう。殿下には勝つたわね！」

ウルリカは嬉しげだ。

「忙しい身の上の殿下と張り合つのはどうかと思うけど」

ノエルの心の声を代弁したように、ハインツが言つ。

ぐう、とウルリカは呻いた。

「で、殿下といえば、ノエルは殿下に124字以外の文字教えるんでしょう？」

ウルリカが話をそらす。

ノエルは苦笑してその話に乗つた。

「殿下も乗り気みたいだし」

「それ、私も参加する！」

ウルリカが身を乗り出して拳手する。その瞳は、エドヴァルトと

同じように好奇心と知識欲にきらきらと輝いている。

ノエルはちらりとハインツを見た。

「昨日、ハインツにも言われたの」

「んな！」

ウルリカがハインツを睨む。ハインツは肩をすくめた。そんなこ

とで睨まれても、と言いたげだ。

「124字よりも多くの文字や理論を覚えれば、よりも多くの魔法を使

えるようだよ。そうすれば、僕達の魔法をよく知る僕達が、それぞれの魔法の違いから異変の本当の原因を究明することもできるだろう

う

「そうね。面白そうだわ

「こいつに面白いって言葉を出すのは不謹慎かもしれないけど、僕も同感。すごく面白そうだ」

なんだかんだ言って、同門出身のウルリカとハインツは、魔法という学問に対しての考え方によく似ている。

「生徒が増えたなあ、ノエル」

完全に蚊帳の外となっているミカは、集めた紙面を整理している。写本はきちんとウルリカの炎の届かない場所に安置してある。

「生徒…… そうかもね」

「ミカも覚えれば? 文字も知ってるみたいだし」

ハインツの提案は、ノエルも少し前にミカに言つたことだった。けれど、ミカは笑つて魔法は向かないと断つたのだ。

ノエルさえ知らない文字も、知ある文字も知るミカは、けれど魔法を使わない。使いたいという素振りも見せない。どうしてと問うこととは、なんとなくできなかつた。過去を問わない、というのが暗黙の了解になつているような気がした。ノエルだって、話したくなことはあるから、ミカに対して聞くことはできない。

案の定、ミカはハインツの提案も笑つて首を振つた。

「魔法は向かないから」

断り文句まで一緒だ。

「俺はノエルに文字を教える先生でいいよ。あ、てことは俺、ハインツとウルリカと殿下の、先生の、先生か。敬つていいぞー」

「遠慮しとくよ」

ハインツは肩をすくめた。

ウルリカははあつと嘆息しながらミカの手元を覗き込んだ。

「それ、写本の訳文?」

「メモみたいなものよ」

ノエルが答える。

「あ、読めない……。ノエルの母国語？」

「母国語といふか……日常的に使つてた言葉よ。メモ程度にこの国
の文字で考えて書けないし」

「そうね。これはなんて書いてあるの？」

「えーと……」

ウルリカの示した部分は、ノエルの知る歴史を思い出しながら年
表的に書き出しているものだつた。

「昔読んだ本の中身を思い出していたの」

適当に内容を「まかして伝えると、やうとは知らないウルリカが
興味深げに頷いた。罪悪感がちくちくと胸をさす。ウルリカはまだ
いろいろと聞いてくる。彼女にとつては見知らぬ知識だ。熱心な学
徒であるウルリカが、この機を逃すはずもない。どう切り上げよう
か、ノエルが思案しだした頃。

「ノエル」

ミカが呼んだ。

「そろそろ俺行かないと」

「ああ、うん、見回りだつけ」

「そ。たまにはノエルも街に出たほうがいいぞ? こないだのエレー
ナさんのところでもいいし。そうそう、文字も読めるようになつたん
だし、図書館もいいかも。ノエル、好きそうだし」

「図書館? 街中にあるの?」

「あるよ」

答えたのはハインツだ。

「異変以降、印刷の効率も悪くなつちゃって、新しい本はなかなか
入らないけど、異変以前の本は十数ある図書館にたくさん収蔵され
ているよ。専門的なものはお上が独占してるけどね。一般的な本は、
識字率の向上について、むしろ奨励しているから」

「へえ」

ノエルは唇に指を当てる。

今度行ってみよう。

「行くときは俺に言ひて。案内するから。でも、本読んでばっかり
じやなくて、ちゃんと気晴らしもするんだぞ。今だつて、朝からず
つとだから、少し休んだほうがいい」「うん……」

「ほら、俺も見回りの前に腹に入れたいし。厨房に頼みに行こうぜ」「そうね」「そうね」

そういうえばお腹が減つている氣もある。

「じゃあ、私は研究室に戻るわ。また明日ね、ノエル

「僕も戻るよ」

ウルリカとハインツが部屋を出ていく。残されたノエルとミカも、
厨房へ行くために部屋を出た。

「……ありがと」

「なにが?」

ミカがとぼける。ノエルは足早に廊下を行く。
「お腹が減つたわ。早く行きましょう」「はいはい」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5835u/>

異邦人

2011年11月8日21時33分発行